

42553

教科書文庫

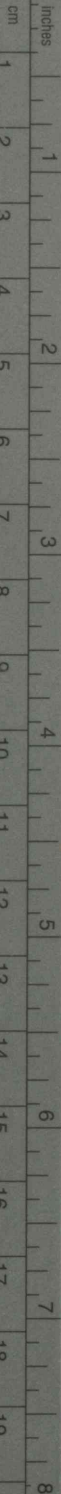
4
810
44-1938
200030
1766

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
Fu10
資料室

帝國新國文政版卷二

資料室

P

資料室

文部省檢定濟
昭和三十一年一月二十四日實業學校國語科

375.9
Fu10

文學博士 藤村作編

帝國新國文

改版

東京

帝國書院



(筆虎小崎川)

笛 牧



帝國新國文改版卷二

目次

一	日本民族の發展	田中義一	一
二	盡忠報國	西條八十	四
三	大村益次郎	後藤新平	七
四	西郷吉之助に會つた話	増田義一	一五
五	美しい我が國	福澤諭吉	二〇
六	三種の人間	薄田堇	二四
七	雲龍の圖	山本鼎	二九
八	工藝品	五十嵐力	三五
九	隨筆三章		四五
	一 栗盜人		四五

二 茹栗
三 築山

一〇 愛國の歌

一一 日本武士の精神

一二 筋肉労働

一三 病床より

一四 童心

一五 青年よ大志あれ

一六 鳩のねくら

一七 死んだら土になる

一八 北海道の旅

一九 梅の花

二〇 父の思ひ出

二一 日本の幸福

四七

五一

五三

五六

六一

六五

七〇

七五

八五

八九

九七

一〇三

一〇六

一一一

藤村作

大町桂月

徳富蘇峯

高山樗牛

相馬御風

永田秀次郎

中勘助

三浦修吾

九條武子

千家元磨

齋藤茂吉

大森金五郎

二三 母

二三 父母に別れて

二四 忠敬の晩學

二五 出征

鶴見祐輔

二葉亭四迷

幸田露伴

一四六

一三八

一三三



田中義一
山口縣の人
陸軍大將
内閣總理大臣
昭和四年歿(年
六十七)

一 日本民族の發展

田中義一

世界の大道は平かなり。この大道に由りて四方に通じ

生々の業を營み、産を興し、勢を積む
は、民族の發展伸張する所以なり。

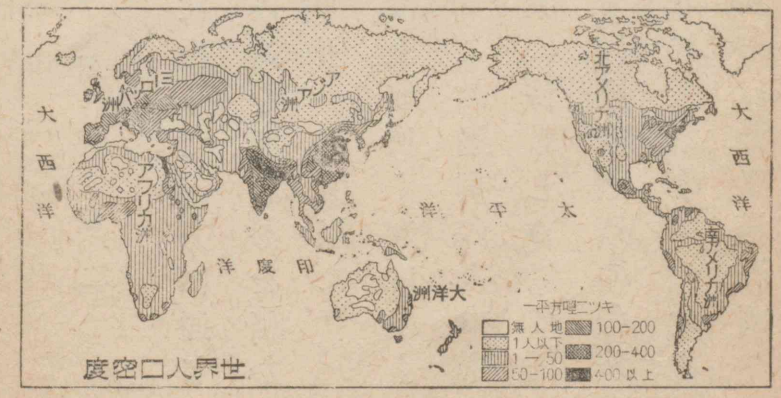
我が國內地は、土地狭く人口多く
して食足らず。この過剰の人口を、
他に移して生業に務めしめ、以て民
族の發展を圖るは、國家焦眉の急務
にして、かつ百年の大計なり。北海
道や、朝鮮や、臺灣や、はた又滿洲國や、



滿洲國に於ける日本移民

我が民族の移住に可ならざるはなし、
須らく往いて生産を興すべし。

更に遠く海外に出でて、我が國民を
歡び迎ふる地に移住せよ。北米合衆
國には既に移住せる邦人約二十五萬
を算すと雖も、その國今や我が移民を
拒絶す。されど尙南米・南洋の廣大な
る天地の門戸を開いて日本人の移住
を歓迎するあり。意氣壯に生意盛ん
なるものは奮つて之に赴くべし。堅
忍不拔の精神を有する青年は、進んで



之に赴くべし。往けや往け。往いて到る處に新郷土を拓
き、大和民族の發展を圖るべし。是實に皇室と國家とに忠
なる所以なり。而して移住者は善く海外國の制度を守り、
その風俗に同化して、その人民と融和せざるべからず。
我等の祖先は、西邊より興りて、東國に遷り、中國を從へて
その民族を植ゑ、他の民族と同化して、この國を建て、帝業を
創めたり。今日の國民は、この狭き國土内に群居して安逸
を希ふことなく、進んで地廣く、人口稀なる處に伸展し、以て
祖宗建國の大事に恥づること勿るべし。日本帝國の青年
それ克く之を努めよ。

(明治天皇御製)

をちこちにわかれすみても國を思ふ
人の心ぞひとつなりける

——壯丁讀本——

西條八十

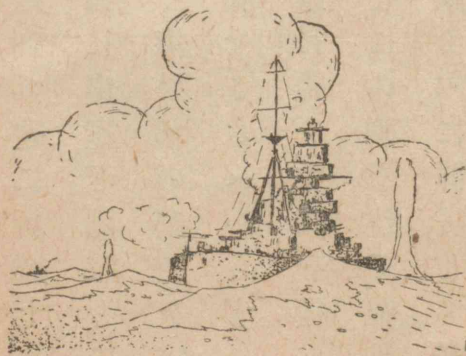
東京市の人
詩人
早稻田大學教授

二 盡忠報國

西條八十

豊榮昇る日の本の
われは戟執る丈夫ぞ、
稜威畏き皇の
われは衛りの丈夫ぞ。

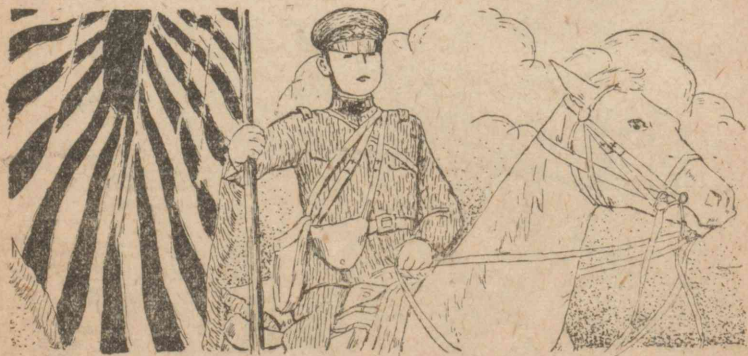
神統二千六百年
嘗て異國の侮りを



受けしことなき海陸に
われらがかざす日の御旗。

陸には荒ぶ毒瓦斯、
海には奔る潜水艦、
時の潮にともなひて
戦の術は變れども。

大義は重く、死は輕し、
われらが遠き祖先より
繼げる盡忠報國の



至誠に優る力なし。

意氣は芙蓉の峰の雪、

死は三吉野の櫻花、

わが武士道の精神を、

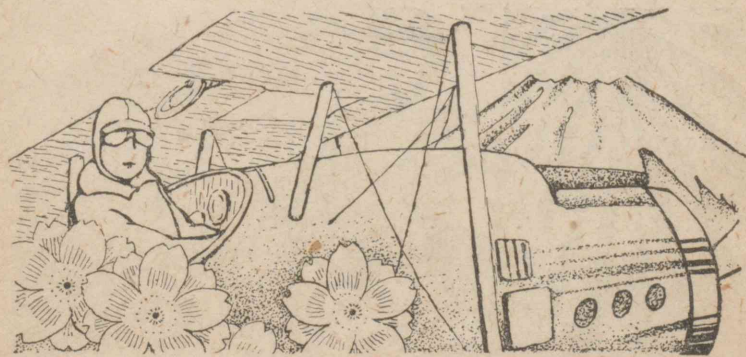
普く世界に誇耀せん。

豊榮昇る日の本の

われは戟執る丈夫ぞ、

稜威畏き皇の

われは衛りの丈夫ぞ。



三 大村益次郎

九段坂上、靖國神社の境内には、双眼鏡を片手に持ち箒の



大村益次郎銅像

としての彼の英姿を模したものである。

上野の彰義隊は、將軍慶喜に一橋時代から仕へた旗本の

やうな眉を揚げて、遙

か上野の方を決然と

して望んでゐる大村

益次郎の銅像がある。

これは、上野彰義隊攻

撃當時、官軍の指揮官

慶喜
徳川第十五代將
軍
大正二年歿
(年七十七)

汚名
明治元年正月、
慶喜、討薩表を
携へて會桑二藩
の兵を先鋒とし
て上洛しようとし、
薩長の兵と
戦つて大敗し
た。かくて朝敵
の汚名を蒙つて
大阪から江戸に
歸つた。

輩が、彼の汚名を雪がんとして組織されたものであるが、後には諸藩の脱兵も加つて、その數二千餘人を算した。明治元年五月十五日、官軍は大村の作戦に依り、薩藩兵は正面より、長藩兵は背面より、その他の藩兵は側面より之れを討つた。彰義隊は大砲を山王臺に据ゑて、防戦大いに努めたが、黒門口先づ破れ、新黒門口次いで守を失ひ、終に支ふる能はずして四散した。



彰義隊旗

最初上野攻撃のことが決定すると、參謀林通顯は、二萬の兵力が必要だと力説した。しかし、大村は府内の兵三千で

澤山だと斷言した。これを聞くと、西郷隆盛は驚いて、薩藩の兵を全滅にする氣かと、大村につめよつたといふが、大村の作戦はその杞憂を一掃して成功したのであつた。かうして國內の平定と共に、兵制の整備は着々進んだ。この時、天下の士は皆維新の際に奥羽が官軍に抵抗したのだから、將來においても禍は必ず奥羽にあるだらうと考へたが、大村は是等の意見に反し、奥羽は敗北の餘り、今後五年乃至十年は容易にその頭を擡ぐるを得ないであらう、恐るべきの敵はむしろ西方に出るであらうと考へてゐた。即ち明治十年の西南戦争は、明治二年の頃に早くも彼の頭腦に映つてゐたのである。

だから、彼の施設は、この考に基くのであつて、大阪に造兵廠を設け、宇治に火薬製造所を置き、又八幡に火薬庫を造り、海運の便と水利の便とを以て、陸軍の根據を確定し、又遙かに西南に備へようとしたのであつた。

更に彼の經綸の規模は大きく、從來の藩兵を解散させ、徵兵令に依つて、國民皆兵を實現するとともに、軍職にない者の佩刀を廢して、これを軍隊だけに限らうとした。しかしかやうな根本的大改革は世の誤解を招き易いのであつて、果然彼はその犠牲となつて斃れることになつた。

明治二年七月二十七日、彼は近畿に於ける諸設備の計畫案を練るために東京を發し、甲州より木曾路に出で、八月十

三條木屋町
京都市三條通木
屋町

三日に京都に着、檢閲・巡廻・調査と多忙な日を送つてゐたが、九月四日の夕方であつた、彼が三條木屋町の旅館で加賀及び長州の藩士二名と杯を傾けながら、時事を論談してゐると、訪問客が彼に面會を求めて來た。若黨が彼にこれを傳へてゐる間に、壯漢はどや／＼と闖入して來て、先づ若黨を斬り倒して、「おのれ國賊！」と叫びながら、三人を目がけて斬りかゝつた。神代直人・團伸次郎・伊藤源助等の面々であつた。

「お、貴様は神代か！」と大村が咎むる間もなく、「大村覺悟」と斬り付けた太刀は、大村の額から小鬢へかけて傷つけた。しまつたと思つたが、手に持つた刀を抜く暇もなく、二の太

數がありますか」と問うた。その時大村は「さあ今急には分りません」と答へた。「それはどうも可笑しい。あなたは兵部大輔ではありませんか。日本の兵隊の数が分らぬとは……。」と再び問ふと、大村は「イヤ只今全国の人口の調査中ですから、いづれ明かになるでせう」といふ。バイクスは焦立つて「人口のことではありません。鐵砲を擔いで戦をする兵隊の數をお尋ねしてゐるのです」と重ねて問うた。すると大村は「さうです。だが日本は國民皆兵で、老若男女悉くが兵隊です」と答へた。

大村は雄圖半ばにして世を去つた。しかし彼の抱いた經綸は死ななかつた。彼の死後十三日目の十月十八日に

山縣有朋

元帥・公爵
内閣總理大臣

樞密顧問官

大正十一年歿
(年八十五)

船越衛

男爵

貴族院議員

樞密顧問官

大正二年歿

(年七十四)

曾我祐準

子爵

貴族院議員

樞密顧問官

昭和十年歿

後藤新平

岩手縣の人

伯爵

政治家

昭和四年歿(年七十三)



山縣有朋

兵部省は軍務の大綱を上陳し、これが漸次實行されたのであるが、この大綱が大村の案であつたのは言を俟たぬ。又大村の遺圖は彼の薫陶せる後輩、例へば山縣有朋、船越衛、曾我祐準等に依つて繼承され、そしてそれが現時の日本の陸軍にまで發展したのである。

—日本英雄傳—

四 西郷吉之助に會つた話

後藤新平

自分が會つた人のうちで、江戸に關係ある二人の英雄を

勝安芳

海舟と號す

江戸の人

伯爵

明治三十二年歿
(年七十七)

龍の口

今の和田倉門と

吳服橋との間あ

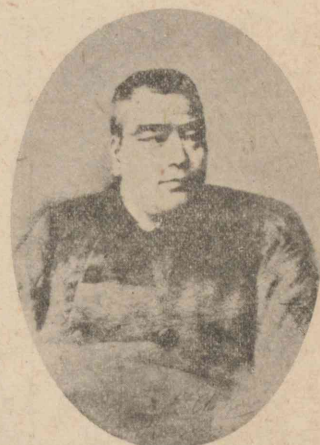
たり

太政官

明治維新當初の

政府の名稱、現

今の内閣の前身



西郷南洲

覚えてゐる。その一人は南洲で、今一人は勝安芳である。

この二人は東京市民が永久に忘れてはならない恩人であると、自分は思つてゐる。

明治四年頃であつた、自分は龍の口の細川侯藩邸内に起臥してゐた。それは太政官の少史莊村省三といふ人の食客になつてゐたのである。莊村氏が太政官に出勤する時にいつも供をしていつた。丁度十五歳のことである。朝は供をして見送り、午後は迎へにいつて、ついで歸つてくるのが役目であつた。

背割羽織
往時馬上或は旅
行の時着たる羽
織

ある日、莊村少史が晝過に出勤した。いつものやうに自分
分は供をしていつた。和田倉門を入つて、坂下門の方へ行
かうとするところは、大名屋敷が兩方にあつた。それは暑
い七月の晴れた日であつた。その邊にさしかゝると、むか
うから大きな男が供を一人つれて、歩いてきた。供といふ
のは當時は若造といつて、大てい十四五から二十位の書生
であつた。ところが、この大男の供は三十くらゐで、袴なし
で、背割羽織をきて、股引を穿いて、尻をはし折つてゐた。
すると、主人の莊村少史が三歩ばかりこちらで、下駄をぬ
いで、下駄の上に足をあげて、お辭儀をした。これは土下座
の代りにする敬禮で、自分が子供のとき、藩侯にした禮であ

る。自分は藩侯以外の人には、この禮はするものではないと思つてゐたので、莊村少史がこの様子をしたとき、全くびつくりした。太政官の少史といへば、後に太政官の少書記官と變つた役で、當時なかく、幅のきいた官吏である。その人が土下座の禮をはじめたのであるから、子供の自分は全く不意打を食つて驚いたわけである。

すると、むかうから來た太男は莊村少史の方をむいて、にっこり笑つて、「お暑うごんすな。」といつて、すたく／＼行過ぎた。自分はぼんやり主人の後に立つた儘、不思議な男だ、不思議なお辭儀だと思つてゐた。すると、莊村少史が「西郷吉之助」と自分の耳にさゝやいた。自分ははつと思つて、過ぎゆく

西郷吉之助

隆盛の通稱

當時參議、陸軍
大將、近衛都督

大男の後姿を見送つた。その時、西郷さんは薄色の背割羽織に、短い袴、下駄ばきといふ姿で、大小をさし、兩手をぶらりとさげてゐた。大男で、色は九州人としては白い方だといふ印象をうけた。大きいはつきりした眼に、愛敬があつた。太い眉毛が今も眼に残つてゐる。「お暑うごんすな。」といつた時に、非常になつかしみがあつたやうに覺えてゐる。

自分の主人が最敬禮をしてゐる折、自分は何も分らないので、草履を穿いた儘お辭儀をした。その時、自分は羽織を着て、袴無しで、腰には長刀だけ一本さしてゐた。

それから間もなく、西郷さんは薩摩へ歸つてしまつた。それが西郷さんの東京引上であつたのである。この日の

邂逅は、まことに瞬間のことであつたが、自分は生涯忘れられない印象をうけた。

今日、西郷さんといふ名を聞くごとに、莊村少史の土下座の禮を思ひ出す。そして

「お暑うごんすな。」

といつた飾りのない挨拶が、今でも耳に残つてゐる。

—文藝春秋—

増田義一

新潟縣の人
政治家

五 美しい我が國

増田 義一

少年諸君は、日本帝國の將來を双肩に擔つて立たなければならぬ。日本帝國が益、立派になるのもならぬのも、諸

君の覺悟と努力の如何によつて決するのである。

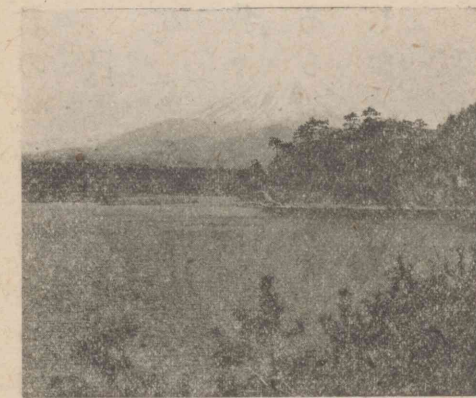
日本帝國は、世界に類の無い皇統連綿たる美しい國である。世界に誇るべき立派な歴史を有してゐる國である。

我々が日本國民たることは、思へば思ふほど有難い限りである。私はこの國に生まれて來たことを、一日として感謝しないことはない。

私共の祖先は、太陽の如く君臨します。日の御子の高遠なる御理想を體して、克く忠に、克く孝に、三千年の光輝ある歴史を建設してきたのである。この苦心經營のあとをよく見、よく察せよ。さうしたなら、諸君は愛國の熱情に燃えないではゐられまい。大勇猛心を振つて奮起しないで

はゐられまい。

世に國家を持たない人民ほど不幸なものはない。國家を輕んずるやうな浮薄な思想は、私共の斷乎として斥けねばならないものである。格言に、「忠臣は孝子の門に出づ。」



とあるが、未だ不孝者の中に忠臣の士の出たためしはない。博愛人道富と「國家を愛する精神」とは矛盾する士ものではない。否、眞に國家を愛する人にして、はじめて眞に人道的行為をなし得るものである。國家を愛することの出來ないやうな人間

には、斷じて人間を愛することの出來た例はない。

少年諸君よ、私が諸君に期待するところは甚だ大きい。諸君は、その純眞な心を以て、神州三千年の光輝ある歴史をひもとくがよい。世界の何處に斯かる歴史を有してゐる國があるか。富士の高峯の萬古に聳え立つ國、櫻の花の爛漫と咲き亂れる國、一系の皇統の無窮にしろしめす國の美しさ有難さが、しみじみと感じられて來るであらう。



(山野吉) 花 櫻

ただ有難涙のこぼれるやうな感激——これが諸君、一番大切である。この感激あつてこそ、絶大の勇猛心も起り、不朽の大事業も成されるのである。私が國を愛する精神を、少年諸君の若い胸中に燃したいと念ずる所以はこゝにある。

六 三種の人間

福澤諭吉

人間の智愚強弱は様々にして、上智と下愚と、至強と至弱とを比較すれば、同じ人類とは思はれざるほどの相違あれども、社會の經濟上より見る時は、概してこれを三等に分つべし。

不具、廢疾の者は、天然の不幸としてこれを除き、生來究竟

福澤諭吉
大分縣の人
教育家
慶應義塾創立者
明治三十四年歿
(年六十八)

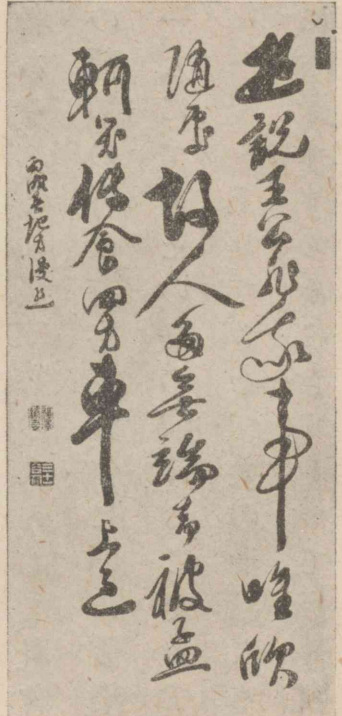
の身體にてありながら、何等の才能もなく、たゞ安閑として飲食し、甚だしきは放蕩無頼、つねに他人の厄介となるのみか、やゝもすれば他を害して自分の慾を逞しうせんとする者あり。これ最下等の人にして、社會全般の爲に謀れば、この種類の者は有害無益、俗にいふ娑婆塞^{しよばさい}げの邪魔者なれば、一人にてもその數の減ずるこそめでたけれ。

一段を上りて、さまで人の世話にもならず、父母、妻子と共に衣食するのみにして、かつて戸外のことに関係せず、間接にも直接にも人に教へたる事なく、又相談に與りたることもなく、一年に得たるものは一年に衣食し盡して、老後、死後の謀を爲すに違あらず、一軒の家を天地として生まれて死

筆蹟

遊スルハ王公ニ
非ニ我ガ事ニ
唯欣ニ隨處ニ
故人多ク被ニ
無端却被ニ
孟柯笑ニ
傳ニ食ニ四方ニ
車ニ上ニ過ニ
丙戌春地方
漫遊

するのみ。此の種の人は、一國の良民として決して邪魔者にはあらざれども、社會人事の盛衰には關係薄くして、この世に在りて大いに益するにあらず、無しとて大いに不自由



福澤諭吉筆蹟

を覺ゆるにあらず、先づ以て中の種類なり。

りて、教育の成果
または天賦の才力をもつて、活潑に立働、一身一家の獨立
すでに成りて、世間の累を爲さざるうへに、尙一步を進めて
他人の相談相手となり、また社會の利害を案じ、自ら自身の

地位・才力を省みて、よく事に當るべきを信じて、すなはち戸
外に頭角を現し、或は私に大いに商賣・工業を企て、或は公に
政治上に關係し、或は地方の民利を謀り、或は宗教・教育の先
導者となるなど、恰も一身の働を二分して、一は以て家に居
り、一は以て世に處し、公私兩様の爲に力を盡すもの、これを
最上等とす。

以上三種三等の區別は、必ずしもその人の貧富・貴賤のみ
に由らず、時に或は富貴にして厄介者あり、貧賤にして重寶
なる人物あり。その仔細を詳にしてこれを筆端に記すは、
極めて難きことなれども、事實は明白にして世人の常に知
るところなり。

例へば、一町村一郡一縣に人の死亡することあらんに、これを傳聞してその不幸を悲しむは人情の常なれども、そのこれを悲しむと同時に、又ひそかに私語し、何某の病死眞に氣の毒なれども、實は地方遠近のためによき厄介拂ひなり、彼の親類身寄にても、先づく、安心ならん。など言はるゝ者は下等なり。病死の報知に接して、會葬はしたれども、不幸の沙汰はその日限りにして、翌日よりこれを語る者もなきは中等の人物なり。死亡の新聞に驚くは勿論、病中より様様の噂にて心配の折から、いよく不幸を聞いて、地方の人先づこれを悲しみ、次でこれを惜しみ、この人に去られては云々」とて泣く者あり、狼狽する者あり、數年の久しき、なほ

人の口の端に残りて消滅せざる者は上等なり。

されば、今人が偶然にもこの世に生まれ出でて、その一身の行狀より居家處世の法に至るまでも、上等にするか、中等にするか、はた下等に陥るか、その上中下の差別は、必ずしも學者先生に質問するを要せず、近く地方人心の向背を視察してこれを知るべし。「社會は良師なり」といふ、即ちこれらの事實なるべし。

—福翁百話—

七 雲龍の圖

薄田泣菫

探幽は名畫家の多い狩野家でも、とりわけ畫才が勝れてゐるので聞えてゐた人でした。

薄田泣菫
名は淳介
岡山縣の人
文學者
詩人
探幽

姓は狩野
名は守信
畫家
延寶二年歿
松平伊豆守信綱
武藏川越の城主
寛文二年歿

この探幽が或時、松平伊豆守信綱に招かれて、その屋敷に遊んだことがありました。主人の信綱はその日の記念と

して、雲龍の圖を探幽に求めまし

た。



狩野探幽

雲龍の圖だといふので、墨汁は家來たちの手でたつぷりと用意されました。探幽は畫絹を前に、

しばらく構圖の工夫に思ひ耽つてゐましたが、やがて考へが決つたと見えて、筆をとり上げようとしますと、そこへ次の間から信綱が興奮したらしい顔を現しました。そしてまだ何一つ描き下ろしてない畫絹を見ると、

「何ちや、まだ一つも書いてないのか。さてさて繪師とい

ふものは鈍なものぢやて。」

わざと聞えよがしに言つたかと思ふと、いきなり足の爪先でそこにあつた硯を蹴飛ばして、そのまゝ、次の間に姿を隠しました。墨汁は、畫絹は言ふに及ばず、探幽の膝から胸のあたりまで飛び散りました。まるで氣の狂つた泥鼠が亂暴を働いた後のやうでした。探幽はむつとしました。

「あまりといへば亂暴ななされ方だ。」

眞青に顔の色を變へて、そのまゝ、立ち上つて歸らうとしました。それを見た松平家の家來たちは、てんでに言葉をつくして平謝りに謝りました。このまゝ、探幽を歸しては、

居合す家來たちの大きな手落となると聞いては、探幽もむげに我を通すわけには往きませんでした。彼はしぶく座に歸つて、また畫絹の前に坐りました。

伊豆守の無禮だけはどうしても見逃すわけに往かぬと



雲龍の圖 (狩野探幽筆)

汗の痕を見ると、彼は身内が燃えるやうに覺えました。このいら／＼した氣持から遁れるには、湧き返る憤怒をその

探幽は思ひました。膝から胸のあたりに飛び散つたなまなましい墨

まゝ畫絹へ投げつけるよりほかにありませんでした。探幽は顫へる手に繪筆を取り上げて、畫絹と摺み合ふやうな意氣込で雲龍の圖にとりかゝりました。

程なく畫は描き上げられました。それはすばらしい出来でした。探幽はそれを見て憤怒のまだ消え切らない口もとをへし曲げるやうにして、ちらと微笑しました。先刻から探幽の恐ろしい筆使ひを見て、どうなることかと氣遣つてゐたらしい松平家の家來たちは、お互に顔を見合せて腹の底から感心したらしい溜息を洩しました。

そこへ主人の信綱が、以前と打つて變つて慇懃なものにして、にこ／＼しながら出て來ました。

「先刻はいかい失禮をいたした。氣持に感激がないとい
 い繪は出来難いものぢやと聞いたので、ついその……」
 探幽は始めて信綱が自分に無禮を働いたわけに氣が
 きました。それと同時に、智慧自慢の伊豆守がこの畫の前
 に立つて誰彼の容赦なく、作者を怒らせて描かせた趣向を
 語つて聞かせるだらう、その得意らしい顔つきが氣になつ
 てなりません。で負けぬ氣になつて次のやうに言
 ひました。

「素人衆は一途に感激のことを申されませんが、畫家にとつ
 て大切なのは感激よりもその感激に手綱をつけて引き
 締めて往く力でございます。この繪も引き締めるのに

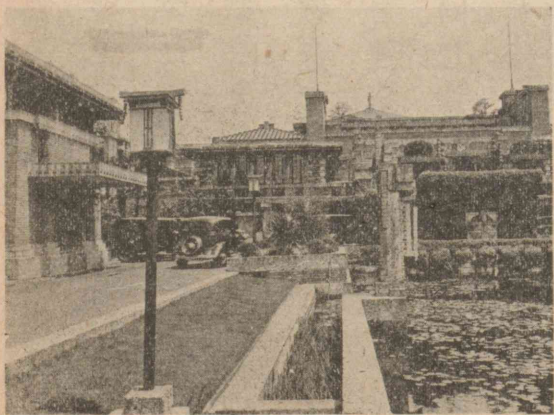
大分骨が折れましたが、まあ、どうかかうか……」——艸木虫魚——

八 工藝品

山 本 鼎

山本鼎
愛知縣の人
洋畫家

工藝品とは、趣味を含んだ實用
 品のことです。小さな物ではカ
 フス釦、大きい物ではビルデイン
 グ、おつと、建築を品物扱ひにし
 ては叱られるかも知れないが、しか
 し、ちよつと帝國ホテルを思ひ出
 して見て下さい。形といひ、色合
 といひ、諸處の飾といひ、正に一つ



ルテホ國帝

の大きな工藝品ではありませんか。「建築は人間の住まふ機械である」と有名な建築家のいつた言葉が正しいなら、建築は人間の住む品物である」といつたつて、をかしくないと思ひますね。實は工藝品を考へるに當つて、ビルディングをも品物扱ひにするくらの意氣込でかゝる方が宜しい。左様に一目に見下す呼吸がないと、建築の面白味も分らないし、よい建築も出來ません。又同じ意氣込でカフス釦に向はなければ、カフス釦の面白味も分らないし、よいカフス釦も作れないでせう。

さて趣味を含んだ品物が工藝品であるとする、われわれの身のまはりには工藝品だらけです。試に、諸君の身のま

はりに、それを擧げて見ませう。諸君の一人をA君として、A君の衣食住を通じて、どれほど工藝品があるでせうか。まづ「衣」に於ては和服・洋服がありますが、スタイルが随分違つてゐるほか、色合も、縞柄も、織り方も、材質も、まるで違つてをります。そして、それは工藝上の相違なのです。即ち工藝上の意匠・圖案・工作の相違に外ならないのです。靴と下駄・帯とバンド、半襟とネクタイ、櫛とヘアピン等、それらも同様の相違です。A君は詰襟の學生服を着てゐる。そして、その服には、型で裝飾模様を打出した眞鍮の釦がついてゐますが、その釦は何でせう。いふまでもなく、それは工藝品です。A君は學生帽を冠つてゐる。その帽子は黒い羅

紗で作つてあつて、庇とバンドは同じく黒いにしても、エナメルを塗つた皮製で、艶々してゐます。そして、彼の帽子のスタイルは、お巡りさんの帽子とも、驛夫さんの帽子とも、大學生の帽子とも、高等學校生徒の帽子とも違つてゐます。その違ひは何でせう。それは正に工藝上の相違であつて、帽子は即ち工藝品です。

A君は腕時計をしてゐます。その腕時計を買つてもらつた時、A君は時計屋で、時計のスタイルの實にさまざまのことに氣がついたでせう。時計の中の文字にしても、時代と國、若しくは製造した會社によつて、皆違ふのです。そしてそれは工藝上の相違で、時計は即ち工藝品です。A君のポ

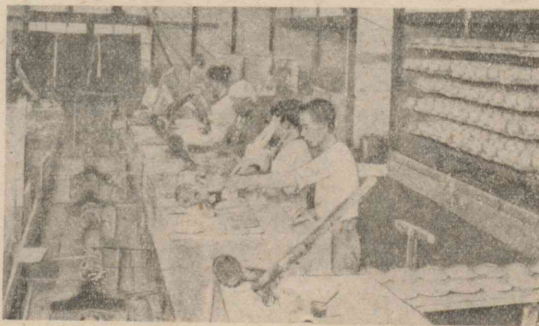
ケットには蝦蟇口がはいつてゐます。蝦蟇口の中には、銀貨と銅貨とおさつが一枚はいつてゐます。蝦蟇口は、彼のおちいさんの持つてゐる蝦蟇口のやうに、野暮な恰好はしてゐません。よしそれが八十錢均一の品物にしる、斷然現代味のある皮革工藝品です。蝦蟇口の中の貨幣は、これまた精密な機械工藝品です。五十錢銀貨には御紋章を天にして、左右に鳳凰を、下には桐唐草、中央に五十錢の文字が鑄出してあります。又銅貨は、一錢の文字が二重の細枠で圍はれて、その外輪は菊花唐草で飾つてあります。そして、これは明かに日本帝國の現代の金屬工藝品であります。更にA君の持つてゐる一圓札を見て下さい。横四寸七分、豎

20566487738

ゴデツク
活字の形の一種
で字畫の一樣に
太いものをいふ

二寸八分の鳥の子紙は、銅版の版畫によつて、品よく装はれてゐる。黒・朱・樺の三度刷、圓に楕圓に唐草を取合せた圖案、武内宿禰の肖像が寫眞風に印刷され、大小の文字が楷書に、行書に、隸書に、ゴデツクで印してあります。さてこの版畫は一體何か。日本銀行の兌換券であると共に、それは即ち印刷工藝品であります。

次にA君の「食」に關係する工藝品を見ませう。こゝでは陶器が顔役で、漆器・鐵器・竹細工等が働いてゐます。即ちA君が今、御飯をてんこ盛りにしたお茶



(燒水清) 造製器磁陶

碗は、瀬戸の陶土を焼いて作つたもの、お皿も、小鉢も、醬油つぎも、土瓶も、同じくいはゆる竈窯工藝品です。味噌汁を入れたお椀や、澤庵を挟みとつた箸や、飯を貯へる塗櫃等は漆器で、傍の鐵瓶や火箸は鐵器です。更に、A君の「食」を支度する臺所へいつて御覽なさい。なほいろ／＼雑多な工藝品が見つかります。

A君の「住」にはどんな工藝品があるか、これは數へきれないほどいろ／＼な物があります。試に、極く大ざつばに擧げてみませう。まづA君の机・本箱は、俗に指物といはれてゐる木材工藝品ですが、木材工藝品は、お座敷やお父さんの書齋の方へゆくと、もつとずつと立派なものがあります。

桐の白木で作つた和服筆筒や、マホガニイ塗の洋服筆筒があり、唐木細工のちやぶ臺や、長火鉢があります。お母さんの大きな姿見は、桑の木で出来てゐるし、女中部屋の小さな姿見は、桂の木で拵へてあります。シンガミシンは木材と鑄物で作つた機械、書齋の額縁は彫刻で飾つた木工作品、床の間の花瓶はフランスのセーブル陶器、遠棚の置物は螺鈿細工の支那櫃、床柱は磨き上げた胡桃の自然木、壁は藍鼠色の砂摺、疊の縁はお座敷のは澁色、A君のお部屋のは紺、お父さんの書齋は、疊の上に上海で買つて来た絨氈が敷いてあります。—こんな風に眼につく品物を擧げて、更にその品物を加工してゐる種々な工藝品を擧げた日には、きりがある。

セーブル
パリの近くに
ある町
名高い陶器の陶
磁器製造所があ
る

りません。早い話が、三越にしる、其他のデパートメントストアにしる、各階一ばいに列べてある商品の九十パーセントは、工藝品なのですからねえ。

そして、工藝品がかくも人間に親密なのは、今に始まつたことではなく、大昔からの事實なのです。紀元前四千年、今から數へるならざつと六千年も昔に、エジプト人は粘土や草木や石や銅で、建築家具、武器等を作つてゐるし、支那人は五千五百年の昔に、インド人は四千年の昔に、日本人は



品 藝 工 の 人 ト プ ジ エ

三千年の昔に、やはり似たやうな材料で、必要な品物を自製してゐるのです。

要するに、人間の棲息する所には、必ず工藝品が存在して、政治經濟の發達した時代、及び郷土に著しい發展を見たのであります。諸君のうちには、「工藝品」と聞くと、美術館か展覧會でなければ見られない物のやうに思つてゐる人がありさうですが、それは間違ひです。成程、美術館に陳列してある工藝品は、いづれも代表的な工藝品で、立派な品物でありますが、しかし、それらの品物も、それが製作された時代には實用品であつたのです。又展覧會には、尖端的な工藝品がいろいろあらはれますが、それらの工藝品も結局に於て

實用品たることを志してゐる創作品なのです。ですから、工藝品の世界をもつと廣く見て下さい。諸君は、學校で植物のことを教はつた、そこで植物の世界の廣大無邊なことを悟つたでせう。櫻、薔薇、牡丹、百合等のいはゆる鑑賞植物のみが植物ではないでせう。工藝品についても亦、同様の悟りを持つていたゞきたいのです。

—世界工藝美術物語—

九 隨筆三章

五十嵐 力

五十嵐力

山形縣の人

文學博士

國文學者

早稻田大學教授

一 栗盜人

或日、畑に山東菜の蟲を取つて居ると、板塀のかげに二三人の子供が來て何かヒソ／＼と話して居た。その中に一

人の子供が塀に登りはじめた。塀のすぐ内にある栗の實を落さうとするのらしい。

私はソウツと塀のわきへ行つて、内からコト／＼と叩いた。子供は登りかけたまゝで、大きな聲で「誰だい、誰だい」と尋ねた。私は黙つて居た。

子供はやがて又登り出して、塀の上に手をかけた。私は箒の先で靜かにその手を搔いてやると、子供は、

「誰だい、誰だい、いたづらする奴は。」

といひながら登つて來たが、やがて塀の上から顔を出して、私を見つけると、

「新ちやん、駄目だよ。大人が居るんだもの。」

と言つて、悠々と下りて立ち去つた。

泥棒が主人を誰何するのを聞いたのは、これが始めてである。世界に瀾漫する新しい大波のうねりが、百姓屋敷の隅にまで押寄せて來たのであらう。

二 茹 栗

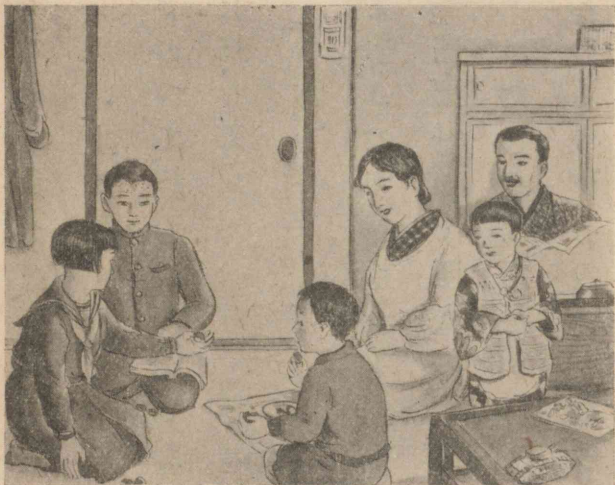
私の友人の知合の奥さんの家庭にあつたといふ實際の話である。

或時その奥さんの家で茹栗の御馳走があつた。有り合せのを茹でたので、餘り澤山もなかつたのであらう。奥さんが茹でながら一つ二つ鹽梅見をしてゐると、茹であがる時分には、大分數が減つてゐた。その家には主人の外に四

人の子供が居た。奥さん自身を入れて六人になるのであるが、六人に分けるには餘りに数が少かつた。そこで奥さんはいろいろ考へたが、さすがに自分は己に食べて居るからとは言ひかねたのであらう、こゝが犠牲献身の母の氣前の見せどころと腹を据ゑて、

「お母さんはたべたくありませんから、お前達だけおあがりなさい。」

と言つて、六つ七つづつ主人と子供との五人に分けてやつた。主人はかねて公平を主義としてゐた人であつた。細君のこの犠牲的行爲を黙つて見ては居られなかつたのであらう。すぐに子供達に向つて、



「お母さんは、自分が食べないでお前達にやるといふけれども、お母さんに食べさせずに、我々ばかり食べては少しも美味しくありません。お父さんも出すから、お前達も一つづつお母さんに御上げなさい。」

と言ふと、一番小さい子が、
「あたい否だ。」

と言つて、すぐに袖で自分の栗をかきした。その次に、一番大きい子が、良くも悪くもない

中位なのを出した。その次に二番目の女の子が、一番旨さうなのを選つて、

「はい、上げます。」

と言つて、静かにお母さんの前においた。最後の三番目の子が、

「さあ。」

と言ふなり、ポウンと蟲の喰つた奴を投げ出した。

「茹栗一つで、四人の根性がすつかりわかりますからね。

わたしはほんたうに怖しくなりましたよ。」

といふのが、その奥さんの懺悔話であつた。

ひそかに物しながら、それを一かどの功名に轉化させよ

うとする心、家内中同様に楽しまうとする公平な心、美味を獨占しようとする利己の心、不承々々に出すお交際式の心、やるのもいま／＼しいといふ捨てばちの心、一粒の茹栗が淨玻璃の鏡となつて、六人六様の心をうつして居るから面白い。

三 築山

私が裏庭に小さい築山を造つた時であつた。或若い友人がこれを見て、築山に興味を感じたといふ事で、自分の庭に新に山を築かうとして、出入の實直な植木屋に命じた。老植木屋は反對した。

「山を築くのがどうして悪いんだ。」

「いゝえ、山をお築きになるのが悪いんではございません。御先代から立派に傳はつて居るお庭の模様を變へて、山をお築きになるのがよくないと申すんでございます。御自分で始めてお築きになる坪庭ならば、山でも、川でも、亭でも、何でも構ひませんが、出来て居る傳來の庭に山を築いて、潰れるか、衰へるか、しない家はないと申しますからね。ええ、そりや本當で。私共が覺えてから、親讓りのお庭に山を築いて、満足に續いた家がございませぬよ。お止しなさいまし。」

友はこの老植木師の忠言に聽いて、素直に築山を思ひ止まつた。私はこれを聞いて、一寸迷信めいても居るが、併し

歴史の偉力はえらいものであると思つた。凡人にとつて從順は第一の美德である。改革を企てる力の無い者の徒な改革は舊きを壞して、同時に新らしきをも失ふ。「やま」はめつたに築くべきものではない。

一〇 愛國の歌

藤村 作

穢きたなき履つらに淨きよき我が土

汚きたさんとせし元寇の

海を蔽おほひし鯨くじらも、

相模太郎が愛國の

至誠の前に沈しづみたり。

相模太郎
北條時宗
北條氏第八代の
執權
弘安七年歿

たゝへよ、たゝへよ、祖國の精神。

内外の憂並び起りし

時の艱を救ひてし、

明治維新の大業の

礎置きし玉松が

復古の策のけだかさよ。

たゝへよ、たゝへよ、祖國の精神。

悪魔のろひ世界の恐怖、

シベリヤを越え滿洲を

玉松
名は操
勤王家
國學者
明治維新の際岩
倉公に用ひられ
公が力業の多く
は操の畫策する
所であつた
明治五年歿
(年六十三)

ザ
露西亞皇帝の稱
號

おほひて伸びしザイの手も、

我が將卒が愛國の

血しほ捧げて祓ひたり。

たゝへよ、たゝへよ、祖國の精神。

神の肇めしひさしき國の

かしこき生命育みて、

たふとき精神省みて、

迷の雲をかきはらへ、

祖國は安き時ならず。

たゝへよ、たゝへよ、祖國の精神。

大町桂月
名は芳衛
高知縣の人
文章家
大正十四年歿
(年五十七)

一一 日本武士の精神

大町 桂月

我が國に屢、仇討の行はれたるを見て、我が國民は復讐の念強きものなりと斷ずる者あり。復讐の念強きには相違なければ、仇討の真相を探るに、必ずしも復讐の念強きのみに基づけるものにあらずして、名譽を重んずる氣風・習慣に驅られたる結果なり。父母の仇を默許するは、子として不孝極まるものなり、意氣地なきものなりとて、社會は之と齒せず。されば、否でも應でも仇討をせざれば、社會より棄てらるゝなり。一身一家の名譽を保たんとせば、是非仇を討たざるべからず。畢竟するに社會が討たしむるなり。

單に仇を憎むの情のみより出でたるにあらず。

熊王
赤松光範の臣
宇野六郎の子
楠木正儀
正成の第三子
元中間歿

日本人は飽く迄も人を恨み、人を憎むやうなる女々しく執念深き國民にあらず。熊王父の仇を報ぜんとして楠木正儀に仕へ、時期を窺ひけるに、正儀は情深き仁君なり。熊王その恩に感じ、之を刺すに忍びず、思ひ迫つて自殺せんとせしが、人に妨げられて果さず、己を得ず僧となりてその身を終へたり。洵に可憐なる心事にあらずや。窮鳥懷に入れば獵夫も之を殺さず。武士は「ものあはれ」を知る。日本武士は、勇強なるが中にやさしき情味あり。如何に父の仇なればとて、屍を鞭つまでに残忍刻薄ならず。我が國、古來悪人なきにあらずしかど、惡魔の如く毒々しき人は未だ

源為朝
為義の第八子
鎮西八郎と稱す
保元の亂に伊豆
大島に流された
嘉應二年歿

曾てこれを見ざるなり。

十五歳にして九州を征服したりし源為朝が、我が爲に父

が責を被ると

聞き、一死父を

救はんとて、百

戦の山河を捨

てて孤身都に



(筆 橋 香 口 谷)

戰 奮 朝 爲

上り、從容刑を待ちしが如き、何ぞその心事の可憐なるや。
手には劔あれども、胸には涙あり。強かるべくして強く、優
しかるべくして優し。日本武士の美、實にこゝにあるなり。
かゝれば一方には義俠心の盛なること他にその比を見

氏康
北條氏康
氏綱の子
元龜二年歿

ず。上杉謙信の如きは、高潔にして義俠心に富める日本武
士の好標本なり。氏康の徒、鹽を甲斐に送ることを禁じて、

卑怯にも武器以外の食糧をもつて武
田信玄を苦しめんとしけるに、謙信之
を聞いて曰く、

「我は武器を以てこそ相争へ、徒らに
鹽を絶ちて敵を苦しましむるは、豈
武士の本意ならんや。」



上 杉 謙 信

とて、命じて鹽を甲斐に送らしめたり。信玄と對峙するこ
と十數年、一朝信玄の計を聞くや、箸を投じて歎じて曰く、
「好敵手を失へり。」

と。古來強敵の死して雀躍せるものはあり。敵死して泣きしものは獨り謙信あるのみ。人勸めて曰く、

「信玄の死に乗じて甲斐を取るべし。」

と。謙信聽かずして曰く、

「信玄在世の日、我これを取るこ

と能はざりき。いづくんぞそ

の死に乗じ、その虚弱に乗じて

これを取るに忍びんや。」と。

何ぞその心事の高潔なるや。その兵を信濃に出して信

玄と争ひしは、村上氏等の弱を援けん爲なり。その兵を關

村上氏

村上義清

信濃葛尾の城主

元龜二年歿



武田信玄

義輝

足利義輝

足利第十三代の

將軍

永祿八年歿

東に出し、は、上杉氏の爲にその舊業を恢復せんが爲なり。その兵を京師に出さんとせしも亦、將軍義輝の依頼ありしが爲なり。謙信は一に義の爲に動きて、一身の野心の爲に動かず。弱を援け強を挫くを己の天職と思へり。義烈、俠勇、宇宙間有數の好男子にあらずや。

一筆のしづく

一一 筋肉労働

徳富蘇峯

徳富蘇峯

名は猪一郎

熊本縣の人

貴族院議員

帝國學士院會員

スポーツ

運動・競技

理窟を抜きにして、筋肉労働を尊べといひたい。今日では運動といふことが、全國を擧げて盛んである。スポーツの全盛時代である。スポーツ結構。決してそれを悪いとはいはぬ。それも結構であるが、筋肉労働の大切であるこ

とも忘れてはならぬ。労働などといふことは、ただ労働者



勞 (人く曳を舟) (作介俊條上)

のみに限つたことだと思ふなら、それは大變な間違である。人間はもとくゝ労働すべきものである。ただ文明が進むにつれて、人々は筋肉労働からだんくゝ遠ざかつて行く。

それを心配する人々が、非文明論とか、原始的生活に還れとかいふことを唱へるのは、これもまた一理あることと思ふ。

東京の例を引いても、目と鼻の近い所に行くにも、電車とか乗合自動車に乗るのが普通である。都會の人々はだんだん脚が弱くなつて来る。故に電車や自動車、その他の交通機關が止まれば、脚を失つたも同様で、なんとも困つてしまふのである。

諸君は徒歩で行ける所は、成る可く歩くべきだ。荷物も自分で持てるだけは成る可く自分で持つべきである。銘銘自分のことは自分で爲すべきである。さうすればそこから本當の自治の氣象が生まれて来る。

社會はいつも今のまゝであるものではない。天候にも晴もあれば、雨もある。社會でも同じことである。まさか

の時には、我等は巡査の代りにもなり、運轉手の代りにもなり、配達夫の代りにもならなければならぬ。不斷から此の心掛を持つ者はやがて一人前の人間となることが出来るのである。筋肉労働とは、必ずしも土や石を運ぶことだけ



ニールソム

ではない。歩ける所は歩いて行くことも、自分の靴は自分で磨くことも、風呂の水を汲むことも、雑巾がけをすることも、諸君にとつては、一の筋肉労働である。諸君

ムツソリーニ
伊太利首相
鍛冶屋の子として
生れた
(西紀二六三)

の爲し得る範圍内に於て自分の身體を使ふことが大切である。

伊太利の首相ムツソリーニは、
「勤勞及び紀律、各人皆働かねばならぬ。首相以下皆悉く働かねばならぬ。」

といつてゐる。勤勞紀律、服従、勇氣、これが彼の伊太利國民に對する主張である。勤勞と勇氣、何といふ愉快な言葉であらう。我等もまた大いに勤勞せねばならぬ。諸君、元氣を出して筋肉を働かせよ。

一三 病床より

高山樗牛

高山樗牛
名は林次郎
山形縣の人
文學博士
明治三十五年歿
(年三十一)

秋風もやうやく身にしみくときむくおぼえよろづ
 かなしき時節に相成候處、皆々様御そろひ御機嫌よく
 御暮し被遊何よりく、珍重の御事に奉存候。先日よ
 り御伺ひ申上げんと存候處、去十日ころより風邪の氣
 味にてとかくからだぐあひわるく學校も休みがちに
 致し居候。且つ十六日は文科大學生一同の遠足會有
 之、私事委員の役にて、大抵のことならばゆかねば不相
 成、其日までには是非よくせんと思ひ養生いたし居候
 處、十五日夜よりは少々心地よく相成候まゝ、十六日に
 は思ひ切つて遠足會にまゐり申候。遠足の場所は日
 光中禪寺地方にて、日光に一泊翌十七日歸京のことに

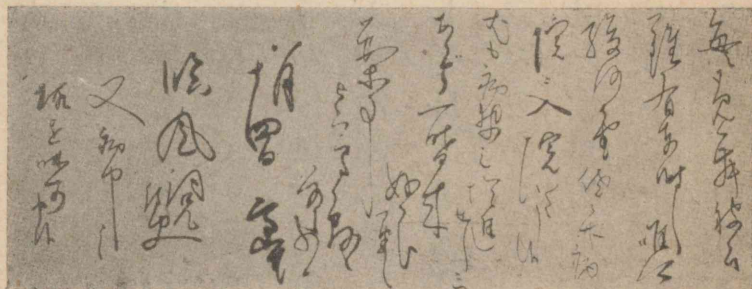
有之候。されば十六日早朝よりおきて六時四十分の
 汽車にて日光にまゐり候。十分さむさをしのぐ用意
 は致し候へども、思ひの外さ
 むく雪ふりて屋根の方々に
 残り候ほどに御座候。其夜
 は宴會にて少々酒のみすこ
 し、翌日は中禪寺より裏見の
 瀧など見物せし爲、いよいよ
 風はわるく相成、せきもしき
 りにいで申候。是は大變な
 りと歸りの汽車は十分用意せしが、何分夜の事故、且つ



中 禪 寺 湖

筆蹟

毎々御見舞被下
有難く奉謝候
唯今駿河臺佐々
木病院に入院い
たし候尤も病勢
の増進せしには
あらず一昨日來
好良に御座候御
案じ被下間敷候
勿々不一
八月十四日
高山生
臨風詞兄
待史
又病中の趣を味
可申候



高山生 牛橋筆蹟

上野につき候は十時半頃にて、それより歸途はことに苦しく、はふくの體にてやどに歸り、其夜一夜は苦しみあかし申候。昨日に相成候へばいよくわるく相成り、晝前はただふらくと眠り申候。昨夜も同様にて候。今日は十一時より校醫に見てもらひに參り候。熱は餘り無之、只せきのみ出で、多分持病の氣管支カタルならんと存候。たいしたる事は決して無之、一週間も相立

ち候は、快癒するならんと存候。只徒然にて困入候。小説など借り集め讀み居申候。文藝俱樂部の御覽濟の分其他何か新しき小説有之候は、御送り御かし被下度奉願候。かやうの時は御内の事御許さまのことなどとかく思はれ、同じ東京に居りながら百里を隔てたらんやうに覺え申候。病氣なほり次第御目にかゝり可申樂しみにいたし居候。御叔父様にもよろしく御つたへ被下度候。自分勝手の下らぬことのみ申述恐入候。め、しと御笑ひ被下まじく候。早々不一申上げたきことはやまく有之候へども後日にゆづりて

叔母上様

一橋牛全集一

相馬御風

名は昌治
新潟縣の人

文學者

良寛

新潟縣の僧
天保二年寂
(年七十四)

一四童心

相馬御風

良寛は最も淳真なる人間であつた。最も博大なる愛の人であつた。彼は何よりも童男童女を愛したが、彼自らも最後まで同じく、幼兒の如き淳真な人間だつたのである。彼は或日例の如く路傍の子供等と交つて、かくれんぼをして遊んでゐた。中に意地のわるい子供が一人あつて、彼が物蔭にかくれたのを、そのまゝ置いてきぼりにしようといひ出して、無理に他の子供を同意させた。子供等は去つた。そして數時間を経ても、なほ彼等は歸つて來なかつた。しかし和尚は、平然と元の通りにして、子供等の「よし」と呼

ぶのを待つてゐた。と、やがてそこを通りかゝつた人が、彼のその様子を見つけて、驚きのあまり、まあ、良寛様。何をし



寛良の裡室庵

てゐられます。」と叫んだ。その聲に彼もおなじく驚いて、「ばか、そんな大きな聲を出す」と、鬼が見つけるわ。」といったといふことが、口碑に傳へられてゐる。何といふ淳真で

あらう。誰かよくかくまでに他を欺かずにゐることが出來よう。

更にこんな話が傳へられてゐる。ある秋の末の夜、良寛

の庵へ盗人が忍び入った。しかし何一つ奪つて行くやうなものがないので、うろ／＼してゐた。と、物音に目をさまして、その様子を見た良寛は、その男があはれになり、自分の着物を一枚ぬいで與へて、やさしく送り出してやつた。しかし彼はあとでその男の身の上を思ひやつて、

いづこにか旅寝しつらんぬば玉の

夜の嵐のうたて寒きに

といふ一首の歌を詠んだといふことである。何といふ貴く、美しい愛の表現であらう。

次に又こんな話が傳へられてゐる。ある年の秋の月の晩のことであつた。良寛は興に乗じて、とある芋畑の中を

筆蹟
心月ノ輪
良寛書



良寛筆蹟

あちらこちらとさまよひ歩いてゐた。と、やがてその畑の持主がそれを見つけて、これはてつきり畑荒しだと思ひあやまり、突然鐵拳を揮つて彼の頭を撲つた。そしてそれだけで氣が濟まずに、とう／＼彼を縛つて、木の枝に吊し上げた。それでも彼はさからはなかつた。が、とうとう堪へられ無くなつて、自分は良寛である旨を白状し、芋などを盗む氣は更に無かつたが、月が佳いのでぶらく／＼歩いてゐたのだと告げて、罪を謝した。百姓は始めてそれと知り、大いに恥ぢいつて、深く罪を謝したが、和尚

は少しも相手を咎めなかつたばかりか、むしろ氣持よささうに笑つて、左の如き一首の古歌を口ずさみながら飄然とそこを去つた。

打つ人も打たる、人も諸ともに

如露亦如電應作如是觀

何といふ虚心の沙汰であらう。

解良榮重
新潟縣西蒲原の
富者

更にまたこんなことが彼と親交のあつた解良榮重といふ人の手記によつて傳へられてゐる。

「人曰く、『錢を拾ふは、至つて樂し』と。師これを聞き、自ら地上に錢を捨て、やがて自らこれを拾ふ。更に情意の樂しきなし。はじめ、人我を欺くかと疑ふ。捨つること再三、つひ

にそのあるところを見失ふ。師百計して、やうやく拾ひ得たり。その時に至つて、始めて樂しきを知る。且つ曰く、『人我を欺かず』と。」

これは又何といふ無邪氣であらう。しかもこれ決して世にありふれた禪僧輩の所謂奇行ではないのである。

—大愚良寛！

一五 青年よ大志あれ

永田秀次郎

永田秀次郎
兵庫縣の人
貴族院議員
先年
大正十五年

私は先年北海道大學の開校五十年の祝賀式に臨み、遙に旭岳の白雲を仰ぎ、茫茫海の如き石狩川の平野を眼前に見渡して、今更の如くに、大學建設の偉勳者クラーク氏の有名なる訓言を想ひ起した。「青年よ大志あれ」この一句、これを

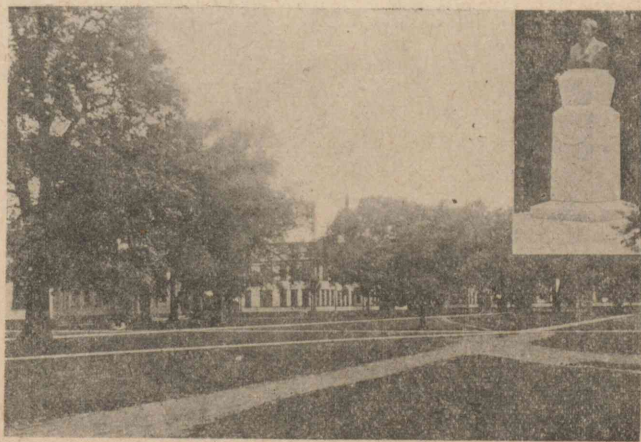
クラーク
アメリカ合衆國
アマスト農科大
學長であつたが

明治九年北海道
帝國大學の前身
札幌農學校と
なつた

北門の大平原に向つて口唱して、更に一段の意義深きを覺えたのである。

我々日本人は、何といつても偉大性に缺くるところがある。何事も纖巧である。小利口である。一寸先がよく見える。小粒で立廻りの敏捷な力士のやうな者が多い。換言すれば幕下の手取りが多くて横綱式の人物が少い。私は之が不満足でならない。

私は幼少の時に、亡父が口癖のやうに私に諭してゐた言



北海帝國大學とクラーク氏陶像

葉を忘れない。「お前は小利口な人間になるな。馬鹿でもよいから大きい人間になれ。」と。この言葉はいつ迄も私の腦中を去らない。私はこの言葉を簡約して、「偉大なる愚者主義。」と呼んでゐる。

それで私の常に青年に對して希望する第一義は「青年は宜しく杉並木の如くに生長せよ。盆栽の如く並ねちけるな。」といふことである。杉の苗木は、一年と、根を張り枝を伸ばしてずん／＼生長するが、その姿態に少しの奇もなく、雅



趣もない。盆栽はひねくれて曲折畸形である程重寶がられる。併しながら、將來棟梁の材となるものは、若木の時に平凡な、そして眞直に生長したものでなくてはならぬのである。之を名づけて「偉大なる平凡」といふのである。

西洋の諺に、「一錢に利口で十圓に馬鹿」といふのがある。即ち眼先の事には利口ではあるが、大局の上に就いては無智であるといふ意である。日本にも「一文惜しみの百失ひ」といふ諺があるが、餘り近視眼的に物事を觀察しては却つて失敗する。人生には風波が多い。目先の一つの波ばかり見てゐては失敗する。少くとも二つの波を見ておかねばならぬ。二つの波に跨がる船は顛覆を免れる。二つの

波を見るだけの心得ある人は決して失敗しない。

かつて佛王ヘンリー四世が英王某を罵つて、彼は最も利口な馬鹿である。」と言つた。その批評の當否は別問題として、最も利口な馬鹿」といふ文字は實に痛快なる皮肉である。小局から見れば、利口で何でも出来る。併し大局から見れば、大馬鹿者であつて、家を失ひ、身を滅すといふ實例は世上到る處に發見される。

世間では往々、平素聊かの注意をすれば後日何の困難も生じないものを、殊更に放任しておいて、さて愈、事件が切迫してくると、刃の上を渡るやうな藝當を演じて辛うじて當座を切抜け、却つて得々然としてその才を誇る者があるが、

ヘンリー四世
(西紀四九一—二六〇)

孫子
支那古代の兵法
名家
名は武

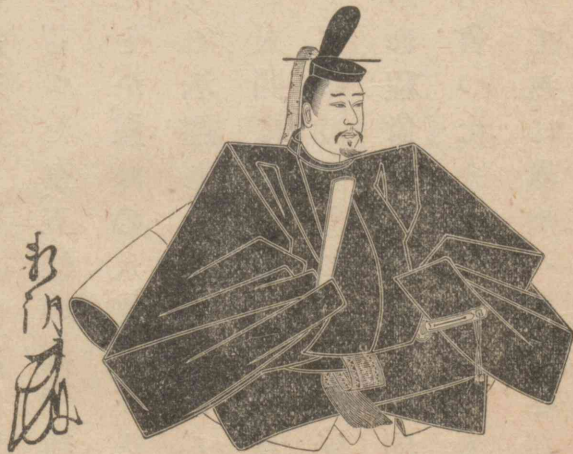
凡そ天下にこれ位愚かな者はないのである。
孫子の兵法に「善く戦ふ者は勝易きに勝つ。故に善く戦ふ者の勝つや、智名なく、勇功なし。」といふ文句があるが、これはひとり兵法のみではなく、人間の處世法に於ても最も大切な訓言である。つまり戦争上手は、豫め周囲の情勢を極めて容易に勝利を得るやうにこしらへておく。それであるから、さあ戦争が始まつたと云へば、平々凡々にすらくと勝つてしまふ。それ故えらい手柄話が出来ない。奇抜な計略もなければ、勇敢な武名もないといふのである。今之を處世法に應用すると、平素用心して事を勉めてをれば、何の奇もなくして自然に成功する事になるのである。

源平盛衰記
源氏と平氏との
盛衰を記した軍
記物語 四十八
卷

私は幼少の頃「源平盛衰記」を讀んで、大の判官鼻^び頂^さであつた。九郎判官、即ち義經といへば、牛若丸といつた幼い時から鞍馬山に登つて、天狗に劍術を習つたり、五條の橋で辨慶を打負かしたり、一の谷の逆落しとか、屋島の八艘飛びとか言つたやうに、目の廻る程華々しく活躍した英雄である。それで子供心にも義經程えらい人間はないと信じてゐた。ところが、私は年をとるに従つてその信念にある動搖を感ずるやうになつた。それは、あれ程偉い義經が兄頼朝と不和になつた時、恰も鼠が猫に出會つたやうに、戦争にも何にもならずひたすら逃げ廻つて、遂に奥州へ落ち延びたといふ憐れな事實である。平家に對してあれ程に強い大

將が、なぜ頼朝に對してあんなに弱いのであるか。これが如何に考へても理解出來ない。

頼朝といへば、少しも強いといふ話がない。頭が大きかつたといふだけで、戦争にかけては全く弱かつたらしい。石橋山の戦ひでは散々に打負けて、朽木の洞に隠れたといふ程の弱虫である。この弱虫に對して、軍神のやうな義經が一戦にも及ばずして逃げ廻るといふのは、到底判断できない事であると思つた。



源 頼 朝

二位尼
清盛の妻

ところが段々考へてゆくうちに、自然々々に、義經よりは頼朝の方がえらいといふ事が分つてきた。頼朝のえらさは、義經のえらさとは全く様子が違つてゐる。頼朝が平家に捕はれて既に打首にならうとして、二位尼の情によつて救はれた時、或者は頼朝に勧めて「頭髪を剃つて僧になれ。」と言つたが、彼は唯沈黙して聞いてゐた。或者は又頼朝に説いて「決して僧などになるな。」と言つたが、彼はこの言葉に對しても唯黙つて聞いてゐた。

頼朝はこのやうに奥底の知れない深味のある人物である。然るに義經は天狗に劍術を習ふとか、五條の橋で辨慶を負かすとかいつた様な、薄つべらな、子供囁しだまの人物であ

る。即ち、頼朝は將に將たるの徳を具へてをるけれども、義經は單に兵に將たるに過ぎない。のみならず、義經は平家討滅の功に誇つて、驕慢の態度をとつた。是等は全く修養の足らない淺はかな、思慮のない行動であつて、兄の頼朝とは段違ひの小人物であると言へる。換言すれば、頼朝は「一錢に馬鹿で十圓に利口」であり、小局に馬鹿で大局に利口である。義經はその反對である。即ち、頼朝は偉大なる愚者であつて、義經は貧弱なる賢者である。義經が



源 義 經

頼朝に手も足も出なかつたのは、誠に當然であると言はねばならぬ。

青年よ、偉大なれ。貧弱なる賢者とならんよりは、偉大なる愚者となれ。

—梅白し—

二六 鳩のねぐら

中 勘 助

中 勘助
隨筆作家

あるとき、ことのほか靜かにしんとふけた晩があつた。あくる朝目をさましたら、いつもと調子のちがふ不透明な雨だれの音がしてゐた。風もそよかす、往來の音も聞えず、戸の節穴からさしこむ光がいつまでたつても黄色みを帯びてこない。私はまた霜がおりたのかしらと思つた。そ

の時どこかで物の落ちる音がして枕にひびいた。私は、
「雪だな。」

と気がついた。それと同時に

「鳩はどうしたかしら。」

と思つた。目がみえなくなつてから降りだしたこの雪に、
ねぐらとたのむ孟宗の枝を幹ぐるみ押し倒され埋められ
て、昨夜どこにどうして夜をあかしたであらう。

雪は思ひの外にもつた。粉雪がまた小やみもなく降
りしきつてゐる。灰色の空から寂しく、いたましく、すさま
じく、音もなく。

その日私はたび／＼鳩のことを氣づかつた。彼女は一

日影も見せなかつた。さうして雪折の音ばかりして日が
暮れた。

翌日空は底の底まで澄みわたつて、ほこ／＼した日和に
なつた。雪が

とけるにつれ
て萌えだすや
うに木の葉が
あらはれてく
る。真紅の南

天の實、暗緑のもちの葉、春を待つどうだんの芽など。鳥は
おの／＼わが身にふさはしい高い低い聲をあげて、とりか



(筆陵岳村中)

鳩

エルサレム
パレスチナの首
府
地キリスト教の聖

へされたエルサレムをことほいでゐる。私の部屋の前の竹は、頭の方をかたく地におしつけられて、屈強な幹を石弓のやうに撓めてゐたが、時を置いては一つ一つひどい勢ではね起きて、眠からさめた獣のやうに身をふるふ。

私が書物を読んでゐたときにはたくと翼をうちあふ音、ひゆうひゆうと風をきる音がした。鳩がねぐらを見に來たのであらう。しかしその竹は細くて力が弱いので、まだ起き上がることができず、いつもその膨らんだ胸をのせる。二股の枝は覆されたやうに立つてゐる。それを見て鳩はすぐに行つてしまつた。

竹がねたためにいつばい日があたるやうになつた私の

部屋は、竹が起きあがるとともに再びもとの日蔭になつた。またもや竹の葉が障子に更紗模様をおく。鳩は折々見にくる様子であつたが、その竹と春日燈籠だけはどうしても起きない。それが今日になつてやつとおくればせに立ちあがつた。私は鳩がまた寝にくるのが嬉しいと思つてそのねぐらを見たら、幹に癖がついたので、肝腎の枝のところか傾いて、寝心地がよささうにもない。どうかしらと危んでゐたら鳩はとうとう來なかつた。

—沼のほとり—

三浦修吾

教育家
大正十年歿
(年四十五)

△七 死んだら土になる

三 浦 修 吾

京都の或友人から聞いた、秋田の山の中の百姓爺さんの

話である。其の友人が爺さんに向つて「爺さん、お前死んだら何になる。」と聞いた。「死んだら土になるさ。」爺さんはかう答へた。爺さんの答は明瞭であつた。「當り前だよ、分つて居るではないか。」といふ様な調子を帯びてゐた。友人は之に對して何とも言ふ事が出来なかつた。「あの爺さんには、ほんとにいつも參らせられるのです。」と、友人は私に言つた。此の爺さんの言葉が、私には實に味はひ深く聞かれる。「死んだら土になるのだ。」此の素朴な力強い一語に爺さんの信念と希望と安心とが、鳴り響いて居るやうに聞かれる。爺さんは、此の一語より以上には何も言ひ得ないであらう。けれども、爺さんの此の一語には、言盡くせぬ程の深い意味

がある。私は感じて居る。

試に考へて見よう。私共の口から「死んだら土になるのだ。」といふ聲が出たとしたら、それはどんなに情ない絶望的な響であるだらう。「此の世は短い。此の世では自分の望は遂げられない。此の世は辛い事ばかりである。偶、面白い事があるにしても、それは一寸の間である。名を成した所で、事功を擧げた所で、自分はやがて死なねばならない。死んだらどうなる。土になるばかりだ、あの冷たい土に。」かうした心持の外には此の言葉を發し得ないであらう。しかるに、此の爺さんの聲は「死ねば極樂に往生する、天國に復活して神と共に限りない幸福の生活に入ることが出

来る。其處にはもう悲みはないのだ、苦みもないのだ。」と信じて、未來の生活を希望して安心して居る信仰の人の言葉に等しい。否、それ以上何處となく底響のある強い信念の力が籠つて居る。

私は、秋田の山の中の百姓爺さんの心中に辿り入つて考へて見た。「死んだら土になるさ。」此の一語に爺さんは、胸一杯腹一杯の喜びを籠めて居るやうに私には感じられる。爺さんは、小さい時から百姓をして、土に親しんで來たのである。四十年も五十年も、毎日々々土に親しみ土に接觸して來た。爺さんにとつて、土は死物でない、無機物でない。爺さんの眼には、土は生きて見える。爺さんの爲には、土は

長い間友達であり、兄弟であり、親である。否、否、土は爺さんの爲には神である、土といふ神である。

爺さんは、毎朝早く起きて、跣足で地上に立つ。土が蹠に觸れる。ちり／＼と土の氣が蹠から爺さんの血管に傳はつて行く。爺さんの身體が温くなる、爺さんの腹が満ち、胸が開け、頭が爽かになり、爺さんの顔が輝いて來、爺さんの腕に力が唸つて來る。爺さんは、鋏を持つて畑の土の中に足を入れる。土は爺さんの鋏に随つて、爺さんの心のまゝに動く、轉がる、覆る。

爺さんの胸中には感謝の念が湧いて來る。あゝ有難いことだ。かうして芋種を植ゑ、大根の種を蒔いて置くと、雨

が降つては土を濕してくれ。日光が照つては暖まりを與へてくれる。そして芋の子が繁殖するのだ。大根が大きくなるのだ。かうして麥も出来るのだ。俺がかうして土の中に立つて、鋤を執つて耕してやり、糞や尿をかけてやると、土が喜んでそれを吸取つてくれて、そして、芋や大根や米や麥を育ててくれるのだ。俺達は其の芋や大根や米や麥を食べて、かうして生きて居ることが出来るのだ。あゝ、人間は皆土のお陰で生きて居るのだ。土がなかつたら、俺達人間は死んで了はなければならぬのだ。

さうだ、林檎が見事に實つた。あのぼうつと夜明方の空の色のやうな、あの赤い黄いろい色。なんといい美しい色

であらう。そして、あの甘いやうな酸っぱいやうな味。人間の手であんな結構な味が出来ると思ふか。都の人が、どんなに骨を折り工面をして、旨い菓子や料理を拵へるからといつても、あの林檎の味に勝るものを拵へることが出来るものか。日本一、いや、世界一の料理の名人だつて、林檎の味ほどのものを拵へることが出来るものか。それは、みんな土が育て上げてくれるのだ。俺は一生土の相手になつて、土の仕事を手傳つて來たのだ。其の報酬に、土が俺に此の旨い物を食はしてくれろのだ。俺は山の中の貧乏者でも、土のお陰で、土の助勢をしたお陰で、都の金持と同じやうに、旨いものを口にすることが出来るのだ。いや、恐多

いことだが、天子様と御同様、此の旨いものを口にすることが出来るのだ。有難いことだ。

爺さんは、鍬の手を止めて、腰を伸ばしながらあたりを見廻すと、朝の露に濕つた土が、朝日の光を受けてきら／＼と輝いて居る。爺さんの胸には益、感謝と報恩の念が湧く。爺さんは天地の恩恵の輝きの中に立つて居るのだ。

此の一生を、鍬を執つて土の中に立つて過して来た。長いことであつた。俺ももうやがて死ぬのだ。死んだら何になる。土になるのだ。大根や芋や米や麥や林檎を育てるのだ。そして子孫や世間の人達を養ふのだ。此の皺くちゃに干からびた俺の五體が、死ねばあの土になつて、五穀

蔬菜を育て上げるのだ。そして人の命の糧を拵へてやるのだ。土になれたら子孫も養へる、天道様に御恩返しも出来るのだ。

死んだら何になる。知れて居るではないか、あの土になるのだよ、あの有難い土様、土といふ神様になるのだよ。

——林檎の味——

一八 北海道の旅

九條 武子

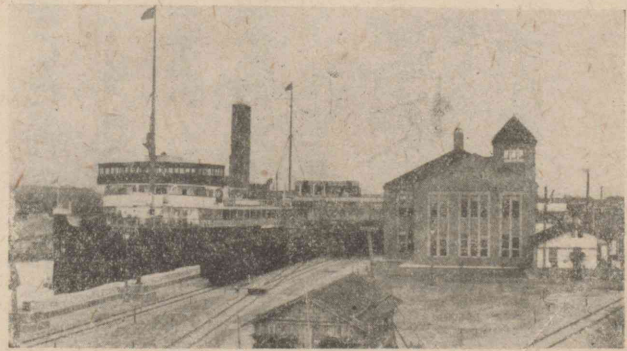
連絡船はすぐ前に横づけにされてあつた。名も翔鳳丸といふ美しい船である。

朝もやに霧雨がにじむ青森灣から、津軽海峽さして静か

九條武子
京都市の人
歌人
昭和三年歿（年
四十二）

に出て行く。舳の波がまつ白な花櫛のやうな形をしては散りつゝ消える。鷗が慕つてくる。マストにあたる東風はつよいほどでもないのに、快い唸りをたてゝゐた。けれども、重たさうな空は何だか暴風雨を呼んででもゐるやうであつた。

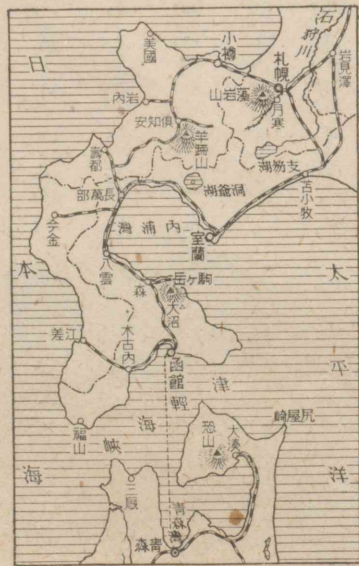
船客たちはデッキに出て、海豚の群でも見えようかと、冷やかな風にふかれつゝ、濃藍の海を見入つてゐるけれども群はおろか一疋も出てこない。海豚は暴風雨の前には必ず出てくるのですが、空を見な



船 絡 連

がら船員がいふ。東風がだんくゝつよくなつた。

それも一時間ばかりで静かになつたので、そつと首をもたげて見ると、船窓には函館の山が見え、町が近づいて来た。入船も出船もすくない港は、なんとなく北海のさびしさを思はせる。ほそい雨がまたふりだした。まひるを靄がぼんやりと包みこまうとしてゐる。船はたくみに棧橋に横づけにされた。野邊原野森林、汽車はその中をひた走りに走る。ひろびろとした野のはてには、はるかに山脈がかさなつて見える。



方地端南道海北

羊蹄山
土人名マクカリ
ヌプリ
海拔一八九三メ
ートル
北海道膽振國に
ある



士 富 夷 蝦

ここらには村もないのであらうか、人のあゆむ道もついて
ゐない。小雨がな、めに窓を打つ。
なんだか寂しいものが漂つてゐる
かのやうに靄がけむつてゐる。ど
ちらが西か東か、それさへ走る車の
なかでははつきりわからず、旅の氣
分がしみじみと味ははれる。
蝦夷富士といはれてゐる羊蹄山
が、をぐらくなつて行く空にも、はつ
きりと重々しい姿をして、大地のお
ごそかな威力をもつて坐してゐるのが近くに
見えて、六時

頃俱知安驛に着いた。驛員のなまりの多い呼び聲に旅の
人らはドツとみな笑つた。いままで退屈と勞れとで滯つ
てをつたものが、一時に洗ひ流さ
れたやうであつた。

月寒の種羊場は悠大な平原の
丘にあつて、柔かな牧草の緑が丘
から丘へと續き、こんもりとした
森の向ふにいくつも小山が重な
つて、一里も二里も先まで羊は遊
びに出てゐるといふことであつ
た。藻岩の山脈がうつすりと、遠い
國のはてを思はせ



場 牧 寒 月

るやうに淡くつづいて見える。大地の静けさ、この牧場と空との静けさ、悠々たる石狩の平原に草を食みつゝ遊ぶ羊は、やさしい瞳をあげて人によつてくる。

群れては離れ、はなれては

寄る廣い野の幾百頭の羊を、

一群にして、一疋の落伍者も

見おとすまいと、守つてゐる

犬は、まるで體操の先生のや

うなかまへで、まつしろな着物をきた牧童の眞横にかしこ

さうな顔をして監督してゐる。この犬についてほんたう

に涙ぐましい忠實な話を聞かされた。



九條武子

夕日がなごりの光を落すと、丘の羊は毎日まもられて安らかなおのが床に歸るのであらう。

—無憂華—

一九 梅の花

千家元磨

千家元磨
東京市の人
詩人



梅は満開だ、

花のイルミネーションだ。

どの枝もどの小枝も

一枚の葉もなくて、

花と蕾ばかりだ。

古風な老い朽ちたやうな、

地に低くはつて曲りくねつた



苦むして物凄くやつれた體から、
こんな可憐な花が咲くのは奇蹟のやうだ。
閑寂の中に一味艶な脈を湛へた
美しい花よ、

私はお前が大好きだ。

私は梅の下を去るのが厭になつて、

背伸びして

花に鼻を近づけて香を嗅いだり、

その無数の精緻な小枝と、

鼈甲の筭のやうな

花の枝々に感心しながら



いつまでもさまよつた。

一羽の目白が来て、

花の間を狂ふやうに、

枝をつかんで

身をさかさまにしたり、

ぶらさがつたり、

啼くことも忘れて、

花の蜜を吸ひながら、

枝から枝へ移つてゐた。

私はその敏捷な運動とほつそりした姿に、

そつと木蔭に忍んで見ほれてゐた。―真夏の星―

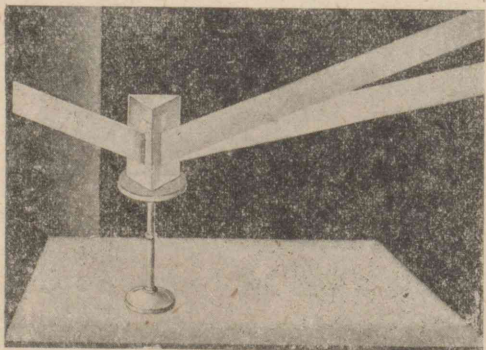
齋藤茂吉
山形縣の人
醫學博士
歌人

二〇 父の思ひ出

齋藤 茂吉

寺子屋が無くなつて、形ばかりの小學校が村にも出来るやうになつた。教員は概ね士族の若者であつた。なかには中年のものも居た。「究理の學」といふことが、時々それらの教員の口から強調して言ひ出された。その頃、父が冬の藁仕事の暇にある教員の所へ遊びに行くと、今届いたばかりだといふ三稜鏡を見せられた。「太陽光といふものはこの通り七綾の光から出来て居る。虹の立つのはつまりそれだ。洋語ではこれをスペクトラと謂つて、七つの綾の光といふことである。舊弊ものは來迎の光などと謂ふが、あ

れは木偶法印に食はされてゐるのだ。教員は神信心ぶかい父の前で、恰も無人の境に行くが如くに氣を吐いた。癩には障つたが、父はせん術なく、頻りにその三稜鏡をいちつてゐた。それは、何かの仕掛は無いか、からくりは無いかと思つたからであつた。が、ちつともさういふ氣配が見えない。そして太陽光を透して見ると、なるほど立派に七綾の光があらはれる。父は暫く三稜鏡をいちつてゐたが、ふとそれを以て爐の火を覗いた。すると、意外にも爐のなかの炎がやはり七つ



ムズリブ

の綾になつて見える。父は忽ち胸に動悸をさせながら、これは、きりしたん伴天連の爲業であるから、念力でなんとかしなければならぬと思つたさうである。

「教師様。御前は、きりしたん伴天連に騙されて居るんではあんなまいな。これを見さつしやい。お天道様も、ほれから、圍爐裏のおきも同じに見えるが、勿體なくはないか。からくりが見えないやうにしてこの中に有るに違ひないな。きりしたん伴天連！おれの念力でなくなれ！」
かういつて、父は三稜鏡をいきなり爐の炎の中に投げ込んだ。教員は驚き慌て、それを拾つたが、忿怒することゝ罷めて、やはり父がしたやうに爐の炎をしばらくの間三稜

大山巖
元帥陸軍大將公
爵
日露戦役の際の
陸軍總司令長官
(大正三年歿)

鏡で眺めてゐた。教員には日輪と爐の焚火と同じものであるか、違ふものであるかの判断がつかなくつた。教員の究理の學はこゝで動搖した。父は滿洲から歸つて來た大山巖のやうな氣持で、そこを引きあげた。
後年父は屢、その話をした。そして開化文明の學問をした教員を負かしたといふ事に非常な得意を感じてゐた。けれども單にそれのみではなかつたであらう。神の本願力を念じて、穀斷ち鹽斷ちをしてゐたやうな父に、スベクトラの實驗がすぐさま腑におちよう筈がなく、そして父の心持が腑に落ちるなどと謂ふよりは、寧ろ反撥したいといつた方がいゝかも知れないからである。

雲右衛門
家號は桃中軒
浪花節の名手

それからずつと月日が経つて、父は還曆を過ぎ、古稀をも過ぎた。その頃父は町のとある店先で、いかにも感に堪へぬといふ風で、蓄音機の喇叭から傳はつてくる雲右衛門の浪花節を聞いてゐたことがある。けれども父はその蓄音機が、究理の學に本づくものだといふことなどを追尋しようともしなかつた。曾て^{カッ}スペクトラを退治した光景なども、無論意識の上へのぼつて來なかつたであらう。

一念珠集一

二一 日本の幸福

大森金五郎

大森金五郎
千葉縣の人
國學院大學教授
昭和十二年歿
(年七十一)

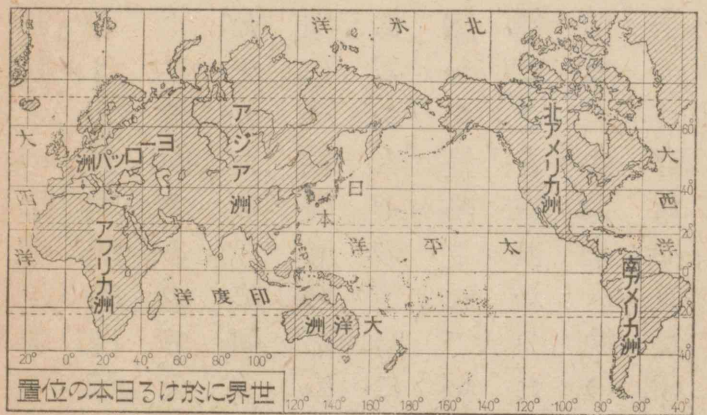
日本の國家の成立の如何は、神代以來の國史に昭々たる所であつて、一天萬乗の君主が之を統治し給ひ、皇室と國民との關係は實に親密で、義は君臣たりといへども情に於ては父子の如くである。これ世間周知のことに屬するが、私は我が國史を讀む毎に何時も日本ほど仕合せな國柄はないと深く感ずる。その仕合せといふのは外ではない、萬世一系の天皇が統治し給へることをいふのである。次には又日本が東海の島國であつて、他國と地續きで無かつたといふことなども仕合せの一つである。

古來一系の天皇が統治するといふことは、世界に絶えて無くして日本國のみにある。これは偶然のことではない。何か然るべき理由があつて此に至つたのでなければならぬ。詮議したならば種々の理由があることであらうが、我が國家の成立が古來綜合家族制度であつて、皇室が總本家となり、國民はその分家支族の關係であつたこと、次に歴代天皇が民の心を以て御心となされ、恩義を以て下を統治し給ひたること、此等が主要なる理由であると考へられる。

古來斯の如く一系の天皇を戴き奉つたといふ事は我が國の比類なき特色であつて、今から世界各國が之を學ぼうとした所で、到底出來得べき事柄ではない。我が國家の成

齋然

嵯峨清涼寺の開
山
京都の人
長和五年寂

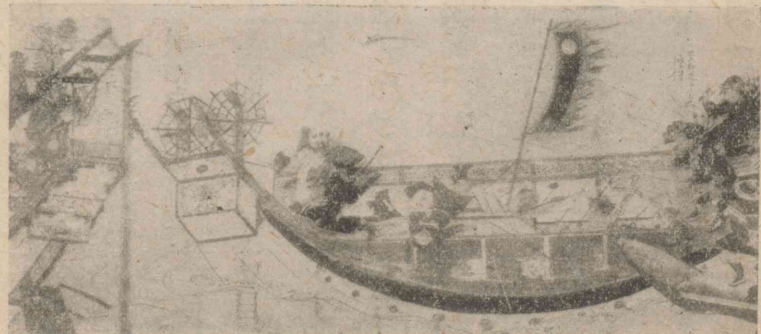


世界に於ける日本の位置

立の初から既に他と違つて居たのである。昔僧齋然が入宋した時、かの國の太宗皇帝が皇室の御世系及び國祚の事を尋ねたので、齋然は詳しく言上した所が、太宗は日本が古來一系の天皇の君臨まします國であることを承知され、これこそ古聖人の法であつて羨しいことである。と歎美されたといふことである。かく我が國家の成立を歎美するものは一の太宗のみではあるまい。

次に東方の島國であつた事が何故

に日本の幸福であるかといふに、若しも日本が朝鮮・印度又は伊太利等の如く半島國であつて、大陸に接續して居たとしたならば何うであらうか。國家に榮枯盛衰のあるは免れ難い所であるから、その衰時に際しては、或は大陸から侵略されて獨立を蹂躪される様なことが無かつたとも言ひ難い。日本人は古來尙武の精神に富んで居たから、容易に他に屈伏する様なことはなかつたであらうが、彼の蒙古襲來



來襲古蒙

(詞繪來襲古蒙)

のことなどから考へて見ても、これが爲に多數の人民を犠牲となし、國財を糜爛したことは夥しからう。然るに島國であつたお蔭で國民の忠勇と相待つて他國の侵略を受けたことは全く無かつた。實に我が國民の大なる仕合せであるといふべきである。

我が日本の國家は、天皇が親しく治めさせらるべき筈である。然るに、中古以來、藤原氏の專横時代や武家政治時代などのあつたのは如何なる理由であるか。

由來、天皇は叡聖文武にましますけれども、天下の庶政の多き、到底御一人を以て處理し給ふことは出來得べきことではない。それ故有司を定めてその事を分擔せしめられ

るのが當然であつて、古來さういふことになつて居る。されば今日の言葉を以てすれば、責任内閣の如きものを設けて、之をして諸般の政務に當らしめ、天皇はその上にましまして之を統御し給ふのが適當のことである。けれども政治の運用方法に就いては、その時世々々に相應の仕方方法があるのであるから、今日の立憲政體の仕組を以て、直ちに之を上古若しくは中世に行はうとすることは不適當であり、また時代錯誤であることを免れないであらう。かくて族制政治の盛んだつた時代には、大臣・大連などが朝に列して政務を執り、その後藤原氏の擅政時代となり、又武家時代となつて來たのである。此等もそれぞれ理由のあること

で、今日から觀れば變體の政治であり、不都合と認むべき點も無いではないが、當時としては相當の理由事情のあつたことで、決して偶然のことではなく、それが又當時の國家には爲になつて居たこと、思はれる。利のある所は害の伏する所で、此等の制度が永續する間には、自ら弊害を生ずるのであつて、藤原氏攝關政治も後には天皇の親政となり、又院政となり、尋いで武家時代を馴致したのである。武家の政治としては鎌倉幕府が其の始を成したのであるがこれは約百五十年間で倒れた。その後徳川幕府が起つて最も長く續いたが、これは二百六十餘年で倒れた。幕府が起つて以來のことを考へて見るに、その間に於て

も執政者の更迭は屢行はれ、或は幕府の更迭を、來して居る。これは、政治の責任上免れ難いことで、恰も明治以後の責任内閣が更迭し來つたのに似て居る。

斯様な譯で我が國體は天皇が統御ましますを本義として、終始一貫して變らないのであるが、政體に至つては時の宜しきによつて古來種々の變遷を経て居る。徳川幕府の末、内治外交の困難に際し、政令が二途に出て、統一を缺く所があつたので、これではならないといふ所から政權の奉還となり、以て明治政府の樹立を見るに至り、尋いで立憲政體となつて、今日の昌運を開くに至つたのである。しかし過去の歴史を見るについては、一概に今日を以て推すべきで

はない。その時代々々の考へを以て觀察して行くといふことが大切である。

！大日本全史！

二二 母

鶴見 祐輔

鶴見祐輔
岡山縣の人
衆議院議員
パース

英國の詩人
(西紀一七五九
一七九六)



スコットランドの天才詩人パースは半神的な崇拜を

受けた人であつたが、一生貧

乏に苦しみぬいた。さうし

て、どうしても三度の食事の

安定を得なくては、詩など作

つてゐられないやうな不安

に襲はれとほした。そこで彼は、その生活安定の基礎たる

僅かの財産を得ようとして焦慮した。彼はこの程度の財産のことを、金といふ文字を使はずして「獨立の巖」と言つたさうだ。

よくこの話を死んだ父が、零落した後、母にしてきかせた。

「さうして、とうとうバーンスは、その目的を達せず、貧苦のうちに死んだのだよ。」と話した。

ことに大正三年の暮から、四年の夏にかけては、母は何時一家が路頭に迷ふやうになるかも知れないといふ不安のうちに暮してゐた。

しかるにとうとう晴れやかな好運の日が廻つてきた。

胸底の氣の張りゆるるに、母は今まで忍苦の生に堪へてきたのであつたが、今運命が一轉して、明るい成功の波が、さんざさんざと戸口に打ち寄せてくると、母は始めて、今までの消極的の勇氣から、積極的の勇氣に變つていつた。

「大丈夫、往けるところまで往つて見ませう。」

さういふ心持が、毎日のやうに母の心のうちに起つてゐたのである。

好運は人間を大膽にする。母は、次第々々に、今まで知らなかつた感覺を味はひ出した。それは、力の自覺といふものであつた。

人間は男でも女でも、何等かの力を持つて生まれついて

ある。才能の力、意思の力、交際上手の力、まだ色々ある。その力を人間は、ある時期に至つて自覺するものだ。一生これを知らずに死んでしまふ人もある。しかし、誰でも一度や二度は、自分の力を意識するものだ。それを正當に知つた人は仕合せな人だ。古來の英雄などといふ人も、要するに自分の力を正當に知つてこれを善用した人だ。

母は生まれて始めて、自分の力を意識した。

母の緻密に考へた思はくは、一つ／＼當つていつた。それと同時に、心持が段々變つていつた。今迄の心配性から脱け出すと共に、仕事の面白みといふものが、母の心からりとさせた。

「母さまは、この頃はいつもうれしさうね。」

と、十一歳になる春子が言つた程、母は冴え／＼した顔をして働いてゐた。

三人の子供のために「獨立の巖」を作りあげてやらうといふ火のやうな決心が、母の胸の中に、朝も晩も、炎々と燃えさかつてゐたのだ。

母は、貧困の家に育つただけに、非常に用心深かつた。一つものを決める前に、心を千々に碎いて考へた。しかし考へが決まつたとなると、持ち前の勇氣が出てきて、なんといつても動かないところがあつた。

大正五年の夏には、もう母の身代は、押しも押されぬ

程、しつかりしてゐたのである。

この時分が、歐洲戦争で獨逸の最も優勢なときであつた。トルコを味方に引入れ、ブルガリアを引入れ、一舉してセルビアとルーマニアを席捲して、獨逸陸軍は阿修羅のごとく東西に荒れ狂つてゐた。日本では大隈侯の内閣が、八方の敵に攻め立てられて、殘燈明滅してゐるころであつた。私は十五歳になつてゐた。中學の三年生であつた。

愈、借金も返し、今後一家は暮しに困らないだけの資産が出来たといふことを、私が母から聞かされたのは、大正五年の一月のことだつた。そのときの私の喜びは母にも解らなかつた。

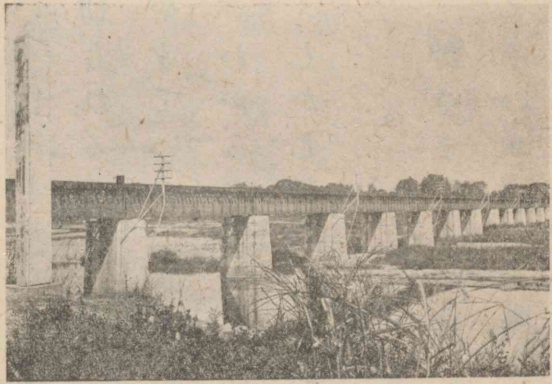
大隈侯
侯爵大隈重信
大正十一年歿

父の没落以來、私はいつも頭を抑へつけられるやうな感じに満ちて暮してゐた。大事な母の涙と、可憐な妹と弟との不自由を、指を喰はへて見てゐるのが、私に取つては身を切られるやうに辛かつた。暗黒な深淵の前に立つてゐるやうで、いつ何時一家がこの深い淵の中に吞まれてしまふかわからないといふ不安が、間斷なく私の頭の中にあつた。しかし母の生活が一轉するとともに、私の生活も一轉した。

「神さまは、やつぱり正しいものに味方して下さるのだ。さういふ感じが、段々と私の心の中に、擴つていつた。

私は、始めて一家の安全になつた事を聞かされた日の夕

多摩川
秩父山地に發源
し東流して東京
灣に入る川



多摩川

方、大急ぎで、家を脱け出して、玉川電車に乗つて、多摩川まで
いつて、誰も人のゐない廣い寒い河
原に立つて、涼々と流れる水に向つ
て叫んだ。

「春が來た。春が來た。春が來た。」

萬歳

と、氣違ひのやうにど鳴つた。

私は胸の氷がバリ／＼と破
れてゆくやうに感じた。ある暖い

悦びが、私の總身に満ちた。

「この地なほ美し、人たることも亦一つのよろこびなり。」

といった獨逸の有名な詩人シラーの言葉を、私はふと思ひ
出した。

私は夜遅く家に歸つてきた。

母は、ちやんと起きて待つてみた。

「只今。」

さういつて、私は元氣よく家に入つていつた。

「お歸り。大そう遅かつたのね。」

母は、につこりして、さう言つた。

涼しい母の眼に、何か聞きたいなといふ質問の表情があ
つた。

「多摩川へ往つてきたんですよ。」

「まあこの寒いのに、何しに。」

「春が来た。萬歳。」つてど鳴りに。」

「まあ、どうして、そんなに遠方へ往かなくてはど鳴れないの。」

「だつて、近處に人のゐるところでは、思ひきつて聲が出せないんですもの。」

「なぜ、春が来た。」つていふの。」

「だつて、母さま、もう僕たちは、安心して暮せるんでせう。」

もう母さまは、夜眠らないで、ご心配なさらなくてもいいんでせう。もう、春ちゃんは、新しい着物を買つていただけけるやうになるんでせう。もう道雄も、道雄も、新しい靴

下を穿いて歩くことができやうになるんでせう……

さうして、……母さまは僕たちの居ないお晝のごはんは、お漬物ばかりで、……お漬物ばかりで……冷たいご飯にお茶をかけてあがらなくても……え、……僕はみんな、知つてゐるんです。」

ポタリポタリと大きな露が、私の兩眼から、古い洗ひさらしの紺緋の着物の上に落ちた。母は、聲を立てたいのを、ちつと我慢して、下唇を噛んでゐた。

「もう母さまは、世間にひけるやうな、窮屈な思ひをして、お暮しにならなくつてもいいんでせう……」

さう言つて私は、しやくりあげて泣いた。私の言つた通り、

私達の家は春だ、春だ、春に違ひない。

母は始めて、いつまでも子供と思つてゐた私が、何から何まで知つてゐるのに驚いた。

しばらくして、母は口を開いた。

「人間の世の中は、七轉び八起きですから、まだ油断は出来ませんけれどね、とにかく、これで大河家は、人さまのお世話にならないで立つてゆけるやうになりました。

ですから、よく考へて頂戴よ。この世の中は、悪いことばかりではありません。雨の日のあとにはきつと晴れの日が來ます。雨の日に失望してはいけません。それにね……」

さういつて、母はちよつと、居すまひを正した。

私も、母の心配を察して、思はず坐りなほした。

「これだけは、どうぞ進さん、一生覚えてゐて下さいよ。それはね、正しい者は勝つといふことです。この世の中で悪が榮えるやうに見えても、それは決して長くつづきません。最後の勝利は正義です。ですから、あなたも一生正しいものは勝つのだといふことを、どうか忘れないでゐて下さいよ。」

「正しいだけではいけません。勝たなくてははいけません。勝つだけではいけません。正しくなければいけません。この世の中では、悪い人間でなくては、偉くなれない

いと考へてゐる位わるいことはありません。正しい人間は必ず勝つものだといふことを堅く信じてゐて下さい。」

「善人の缺點は、弱いことです。それは善が勝つといふ確信がないからです。正義がきつと勝つものだと信じて戦はなくてはいけません。戦はずに引込んでゐるのは、本當の善人ではありません。」

私はじつと母の顔を見上げた、自分の母とは思はれないやうな神々しい威嚴が、母の顔に輝いてゐた。

—母—

名は辰之助
東京市の人
文學者
明治四十二年歿
(年四十八)

二三 父母に別れて

二葉亭四迷

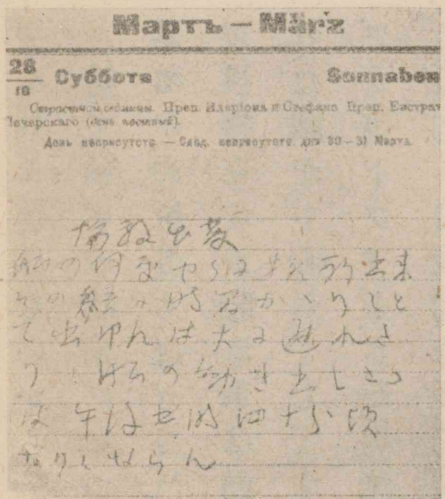
最初はひどく行き悩んだ私の遊學の願も存外難なく聽かれて、遂に上京する事になつた時の嬉しさは今に忘れぬ。愈、出發の當日となつた。待ちに待つたその日ではあるけれども、今となつては如何やら一日位は延ばしても好いやうな心持になつてゐる中に、支度はずん／＼出來て、さて改まつて父母と別れの盃の眞似事をした時には、何だか急に胸が一杯になつて、覺えずほろりとした。私は固より泣いた。快活な父もめでたい、めでたいと言ひながら、頻りに咳をして涙をかんでゐた。詭への俦が來る。性急の父が

先づ周章て出して、座敷中をうろくしなから、それ、風呂敷包を忘れるな、行李は、好いか、小さい方だぞ、コココ蝙蝠傘は己が持つてつてやると、固より見送つてくれる筈なので、自分も一臺の俵に乗りながら、何は載つたか、何は、それ、あの何よ、とあせる程尙思ひ出せないで、何やらわからぬ手眞似をして獨無上に車上で騒ぐ。

母も門口まで送つて出た。愈俵が出ようとす時、母は悲しさうに凝然と私の面を視て、ぢや、お前ねえ、身體を……とまでは言ひ得たが、後が言へないで、涙になつた。

私は故意と附元氣の高聲で、御機嫌よう。と一禮すると俵が出たから、そのまゝ正面になつてしまつたが、何だか後髪

を引かれるやうで、俵が横町を出離れる時、一寸後を振り向いて見たら、母はまだ門前に悄然と立つてゐた。



道々は故意と平氣な顔をし

二て、往來を眺めながら、努めて心を紛らしてゐる中に、馴染の町を幾つも過ぎて、俵が停車場に着いた。まだ發車には餘程間があるのに、もう場内は一杯の人で、雜然と騒がしいので、父が

又周章て出す。親しい友の誰彼も見送りに來てくれた。その面を見ると、私は急に元氣づいて、例になく壯んに饒舌

つた。何だか皆が私の舉動に注目してゐるやうに思はれてならなかつた。無論友達の家で立ち際に私の泣いたことを知る筈はないから……

臆て發車の時刻になつて、汽車に乗込む。手持無沙汰な落着かぬ數分も過ぎて、汽笛が鳴る。私が窓から首を出して挨拶をする時、汽車は動き出した。父の眼をしょぼつかせた顔がちらりとしてすぐ後になる、見えなくなる。もうプラットフォームを出離れて白ペンキの低い柵が走る。その向ふの後向きの二階家が走る、平家が走る。片側町になつて、人や車が後へ走るのが、可笑しいと、それを見てゐる中に、眼界が忽ち豁然と明るくなつて田圃になつた。眼を

放つて見渡すと、城下の町の一角が、屋根は黒く、壁は白く、維然と塊つて見える向ふに、生まれて以來十九年の間、毎日仰ぎ瞻みたお城の天守が遙かに森の中に聳えてゐる。「あゝ、家はあの下だ」と思ふ時始めて故郷を離れることの心細さが身に沁みて、悄然としたが、悄然とする側から、妙に又氣が勇む。何だか籠のやうな狭苦しい處から、茫々と廣い明るい空のやうな處へ放されて飛んで行くやうで、何となく心臓の締るやうな氣もするが、又何處かのんびりと、急に脊丈が延びたやうな氣もする。

かうした妙な心持になつて、心當に我が家の方角を見てゐると、忽ち礎と物に眼界を鎖された。見ると汽車は截ち

割つたやうに急な土手下を行くのだつた。

一二葉亭全集

二四 忠敬の晩學

幸田露伴

幸田露伴
名は成行
東京市の人
文學者
文學博士

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心、ただ伊能家の衰へたるを興し己が任務を最も圓滿に、最も美しく果さん事を期し居たりき。

凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには一擧手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲することのみ身を委ねんとするは免れがたき習なり。たとひ己が欲せざることなりともそのなさざるべからざることなる以上は、甘

んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わがなすべき事をなすは、その人啻に才氣あるのみならず又實に徳量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量



伊能忠敬

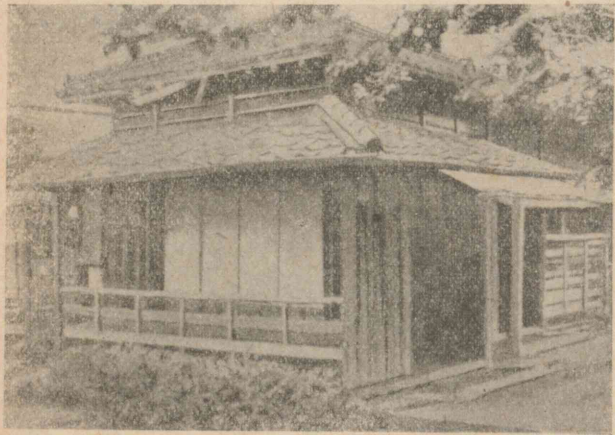
ある人は少し。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し。物を截ることはよくすべし、折るる恐は免るべからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は數へも盡くし難し。忠敬が算數曆術の學を嗜みかつこれをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井

の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く、只管その家業に丹誠したるが如きは、實にその徳量の大なるを見るべきなり。

かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は是に於て圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五十歳、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春

なり。なすある人には、如何なる場合もわが力を試みるべき所たり。忠敬は、常人が世の務



佐原
千葉縣香取郡
佐原町

原を出でて飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學

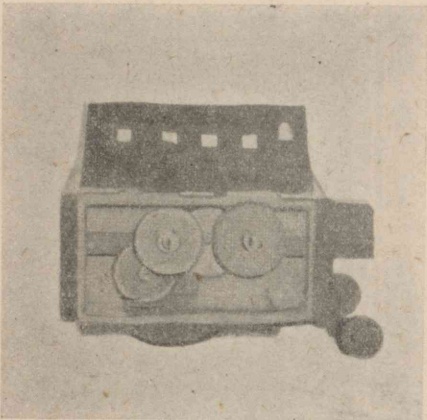
伊能忠敬の書齋
に當つて、始めて學に就き而して後漸く世に出でんとせり。後のなすあらんと欲する者、苟も眞になすあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

さるほどに、忠敬はその郷里佐

生となれり。年こそ老いたれ實に一學生となれるなり。尋常一様に笈を負ひて郷關を出で、都門に遊びて師を尋ね、學に就くところの書生と異なるところは、ただその若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから幕府には曆法改正の擧ありて、これがため特に大阪より高橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門、東岡と號す、算數曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひ

おのれが學業などその人に及ばずとも、猶強ひて自ら高ぶり敢へて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は争でか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき。

喜びてそれが門人となれり。然れども同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば屢笑柄となしたりといふ。



忠敬用のたひ量程車

ありてもかゝる事實の存するがためなり。是を以て、非凡の士にあらざれば、大抵自ら恥ぢて師に就き學を修むる勇

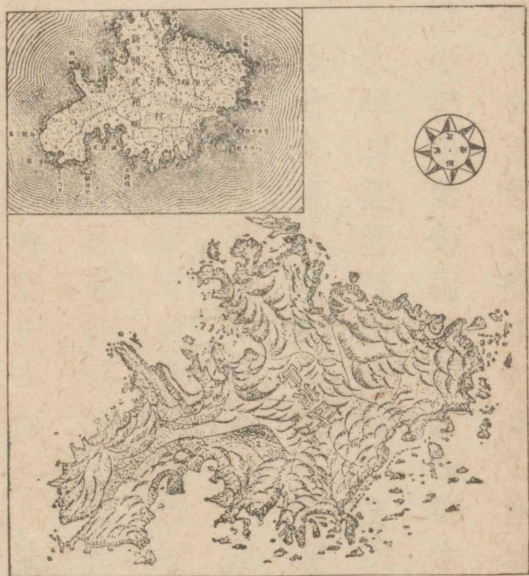
晩學の難きは、實に何れの世に

氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。本來の上よりいへば、老いて學ぶはたま／＼その志の淺からざるを顯すのみ、また何の不可あらん。況やまた何の



旗たひ川に量測

恥づべきところかあらん。思ふに、區々たる群小の嘲笑も忠敬に於ては唯蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば忠敬と同門學生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明かなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきもの



(上)圖地の部本謀參と(下)島根式豆伊たし量測の敬忠能伊

なきに至れり。

かくて、忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは實にその齡五十五歳の時なりき。五十五歳といへば人は頽齡用ふるに堪はずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて

勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃勃として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟、早老の人種なりといふ。是我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。

—露伴叢書—

二五 出征

召集令狀は、忽ち八方へ飛んだ。

大早に雲霓を望むがごとく、只管動員下令を待構へてゐた心持は、豫後備の軍人と雖も我々と何等異なる所はなかつたから、野に耕してゐる者は鋤を捨て、市に商をしてゐる

者は算盤を捨てて、東から西から、或は南から北から、續々と我が兵營を指して集まつて來た。一人の應召員に對してそれ／＼十人二十人位の見送人がある。營内に臨時設置された應召員控所の天幕は、朝から晩まで夫等の人々で満員、又満員。見送人の中には、親兄弟もあれば親戚もある。友人もあれば、町村長、役場員、學校の教師その他もあつた。「與作や。くだいやうだが後の事は心配せぬでな、しつかりやつてくれよ。」
「大丈夫、自慢ぢやないが、銃劍術は一等賞の折紙附だ。敵兵の首の十や二十は小包にして送るから娛しみにして待つてゐてくれ。」

「ヤイ吉太郎、死なば戦死だぞ。病氣などで死んでくれるな、家の不名譽、村の不名譽だぞ。」

「解つてるよ、歸る時は一尺三寸、白木の箱だ。」

「だかな、死ぬ迄は大切な身體だ。食ひ物飲み水にも氣を付けてな。」

「それでは愈、お別れだ。どうも皆様御遠路有難うございました。」

「ぼんざあい。」

「ぼんざあい。」

「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ」の御勅語を映畫にしたやうな光景、側で見ても氣が清々する程、送らるゝ者、送る

者悉くが勇ましい。何れもがかういふ風で應召して來るのだから、萬一體格検査の結果「不合格」とても宣告されようものなら、勢其處に悲喜劇が起らざるを得ない。

「身體のどこが悪いのでありますか。何處も悪い處などはありません。もう一度よく診てください。」

と軍醫に食つてかゝる者もあれば、班長や見知りの將校に泣付いて、

「身體が悪いで除けられては、自分は歸つてゆくべき處がありません。村を出る時、盛んな送別會をして貰つて、一同の前で生きて再び村の土は踏まぬと斷言をして、萬歳の聲に送られて來たのであります。どうかして連れて行つて

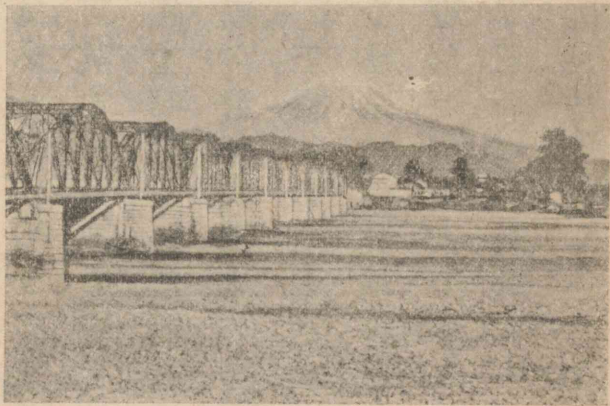
下さいお願いであります。など嘆願する者もある。これは我が聯隊ではなかつたが、補充隊に廻されたのを憤慨して自殺した者さへあつた。しかし編制人員には限りがあるから、一々それを取上げて居る譯にはゆかない。各中隊長はいづれもその壯烈な決心を稱讃しつゝ、

「今度は前古未曾有の大戦だから一年や半年で到底形の附くものでない。一度戦闘をやればすぐ補充員が要るのだ。要するに、唯時間の問題だ、落膽するな。戦地へ早く行くから名譽、遅く行くから恥といふことはない。殊に最後の勝利の榮冠を頂く者は、むしろ汝等補充兵の上にあるのだ。精々勉強して、武を練り膽を鍛へて、出征期を待つて居

よ。」賺しつ、誠めつ、彼等を慰撫するのに骨を折つたものである。自分がかうした光景を日々目撃して、嬉しいやうな、可笑しいやうな、或は涙ぐましい様な、ちよつと簡單には形容し切れない心持になつて、嗚呼頼もしい哉我が皇軍。と感嘆の聲を放たないでは居られなかつた。

三月十六日に至つて動員全く成り、同十八日旅團長兒玉少將來庭、武裝検査を施行された。是より先き三月十五日、戦闘序列を命ぜられて、第三師團は第二軍に編入され、同日軍司令官奥大將から訓示を與へられ、次いで十七日師團長大島中將から訓示が發せられた。旅團長はそれ等の訓示を傳達すると同時に、自らも亦一場の訓示をなし、嚴肅な分

三月十六日
明治三十七年



安倍川の鐵橋より富士山を望む

列式を行はれたので、士氣は彌が上に振うた。萬歳萬歳の聲に汽車がプラットフォームを送り出されて、やがて安倍川の鐵橋を渡つてしまふと、私は漸く自分の席に落付いて、さて靜かに車窓から富士を振返つて眺めた。

「富士山もこれが見納めかな。」と思ふとやはり人間だつた、淡い哀愁の念に打たれた。半腹以上を眞白く雪に蔽はれて天空にそそり立つ崇高さ。その麓に呱呱の聲をあげ、その麓に生ひ

立つた身であり、また二十餘年間、絶えず眼に親しんで來た山影であつたが、この時程氣高くも又懐かしく眺め入つたことは曾て無かつた。

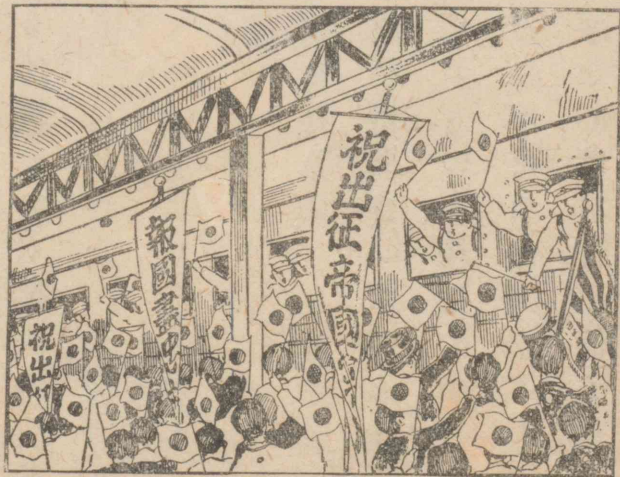
「彼の山の麓に父在す。母在す。」

何時までも何時までも、御健在であれ。」

私は心からかう祈つた。しかし最早格別會ひたいとは思はなかつた。死も、生も、恩愛も、一切のものを超越して全く純な、或は空虚といつてもいゝ程の心持だつた。

無念無想ともいひたいこの平靜な心境は、併し直ぐ「萬歳の聲に依つて破られた。列車が次の驛に着いたのである。」

それからはずつと、我々の列車は萬歳の聲に迎へられつゝ、プラットフォームに入り、復盛んな「萬歳」を浴びせられつゝ、構内を迂り出で、同じことを繰返しつゝ、進行して行つた。どんな小さな驛にも郡町村の代表者といふ様な人々が、大幡小旗を押立てて出て居り、篤志看護婦人會、或は佛教婦人會等の人が出て居つて、湯茶を供されたり、菓子果物その他の物を贈られたりした。數百の小學



生が小さな國旗を打振つて萬歳を絶叫して居る處もあつた。停車場ばかりではない、汽車の走る沿道にはいづこ如何なる處でも、道行く老若男女は皆立止まつて、双手を高くさし上げ、或は帽子を打ちふりなどして萬歳を叫んだ。午前一時、二時、三時といふやうな深夜でも、それは少しも異なる所はなかつた。

私達はすつかり昂奮してしまつた。「この國民の熱烈な信頼と聲援に對して、おれ達はどうして答へたら宜いのか。國家の爲に戦つてくれ、死んでくれ、といふ聲なのだ。あの聲は、さう聞き取つたのは、私ひとりではなかつたらしい。

「あの萬歳々々の聲をきくと、どうしても死なねばならぬ

様な気がした。生きて還つては相濟まぬやうな気がした。
 た。
 誰でもさう言つてゐた。
 —内田軍曹手記に據る—

帝國新國文改版卷二終

帝國新國文改版卷二 定價 金五拾七錢

昭和十二年五月二十八日印 刷 昭和十二年五月三十一日發 行
 昭和十三年一月五日訂正印刷 昭和十三年一月八日訂正發行

不 許
 複 製

編者 藤村 作

發行者 株式會社 帝國書院
 代表者 守屋美智雄

印刷者 東京市牛込區山吹町一九八番地 山本 禎 男

發賣所 東京市神田區西神田一丁目三番地 株式會社 帝國書院
 振替口座東京七〇四

關西販賣所 大阪市東區橫堀四ノ三番地 三宅莊藏書店
 振替口座大阪六九

1月2日同通後

